

AMPHIBIOUS MOBILE SUIT

双葉社 MOOK

**GREAT
MECHANICS**
プラモデルの楽しみ方
スペシャル



モビルスーツ
全集②
水陸両用
モビルスーツ
BOOK

水陸両用 モビルスーツBOOK







- 008 Introduction
- 010 水陸両用MS&MAカラーイラストラインアップ
- 014 水陸両用機小史
- 014 水陸両用機の戦場
ジャブロー／ヘルファスト／大西洋／北極／その他

026 **ゴッグ系**
各種機体解説
ゴッグ／ハイゴッグ

032 **ズゴッグ系**
各種機体解説
スゴッグ／ズゴッグE／ゼーゴッグ／ソゴッグ

042 **アッガイ・ザク系 その他**
各種機体解説
アッガイ／アッガイ／ジュアッガイ
ザク・マリナー／ザク・マリナー
アッガイ／ザク／グラブロー／カプー

062 **連邦軍の水陸両用機**
各種機体解説
水中型ガンダム／アクア・ジム

- 068 Vガンダムの水陸両用機
- 072 水陸両用モビルスーツの迷彩
- 076 ヤマザキ軍曹のプラモバカー代 出張版
- 080 オールガンダム水モビル大集結!
- 086 宇宙世紀の水陸戦力・航空戦力
- 090 水陸両用モビルスーツのメカニズム
- 094 水陸両用モビルスーツ戦術概論
- 100 水陸両用機の武装概論
- 104 水陸両用MS設定資料集
- 126 水陸両用機スベキ一覧





MSM-03

Gogg



MSI





msl k



メ カ好きの男子が、その言葉を聞

くだけでワクワクするメカニズ

ムの中に、複合機能を備えるハイブリ

ッド・カーやフリーゲージトレイン

なども、そういった類に属するのかも

しれない。

大体において、そういったハイフリ

ットなものは、実際はどちらかメイン

となる機能に、もう一つの機能を付加

したものが多く、それも副次的で「で

きなくはない」という程度の、機械と

しては中途半端なものである事が多い。

ハイブリッド・カーも、元をたどれば

電気自動車のバッテリーのテクノロジ

ーが未熟だから登場した、過渡期的な

存在でしかない。

様は、ま
さに怪獣
さでも
いうべ
き姿で
あった。
この
頃、作品
としての
機動戦士ガ
ンダム」のメ
カ描写は、微妙
な舵の変更を迫られ
ていたという。それは、
当初は「ザク」のみで作品
を描くというような方針だった
のが、スポンサーからの要望などによ
り、「新型の敵メカをなるべく出す」と
いう方向へ傾くことになったのだ。結
果から見れば、この方向転換は後のガ
ンダムにとって大きな恵みをもたらす
ことになった。

異形の 姿を持つ



水陸両用機もついていた過中であつたため、わざわざ話しか登場しないにも関わらず、5種類の新型機が登場することとなった。それらはおしなべて手にクローを持ち、そのシルエツトも今までのモビルスーツと一線を画すものだった。そしてもうひとつ衝撃だったのはその強さである。

『機動戦士ガンダム』の作品上において、初出の新型機は常に強い。もちろん、水陸両用の強さもそうだった。演出上の都合に則ったものでしかなかったわけだが、ビーム兵器の使用や、ハイパワ―の描写は、それまでの地上用のモビルスーツとは別のものであった。それは相当なインパクトをもつて迎えられたようで、後の世にその性能を数値化する「設定」がなされる時に、ザクやグフなどよりも高性能機とされ、そのために「水冷式ジェネレーター」などという言葉まで作られた。

ハイブリットなメカのイメージ、怪獣を思わせる異形なシルエツト、そして設定された高性能。水陸両用モビルスーツは、ガンダム世界において特異な地位を獲得したと言っていだろう。水陸両用モビルスーツについては、ガンダムなどとはまた違う、かつよさ、がある」と認知されたということだろう。

しかしその後、宇宙世紀を扱う物語において、水陸両用モビルスーツはほとんど登場する事がなくなった。それは、

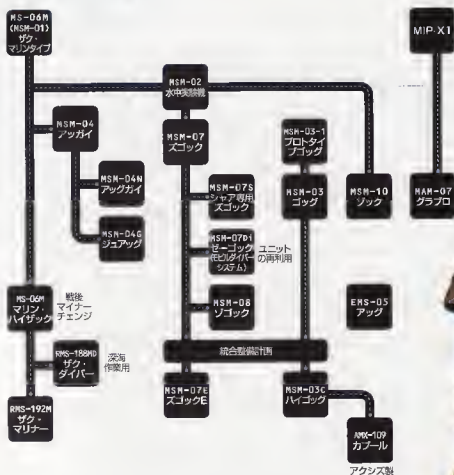
マジンブリッド！

『機動戦士ガンダム』以降、モビルスーツが空を活躍の舞台に選んだ事と大いに関係している。それにより水陸両用機の活躍する余地がほとんどなくなつてしまつたのだ。

しかし、水陸両用の火は消えはしなかった。一年戦争のアナザー・ストーリーを描いたOVA作品や、宇宙世紀以外の世界を扱った作品において、水陸両用モビルスーツは、必ずと言っていいほど登場しているのだ。それでは、水陸両用機はガンダム世界に根を張っているということなのだろう。

本書は、そういった水陸両用モビルスーツたちを、宇宙世紀という世界観の中にある現実の兵器として捉え、あらゆる角度からその魅力をまとめたものである。本書を『算になる事』で先人たちが築き上げた、ガンダム・ワールドの歴史とロマンの一部を、今一度確認していただければ幸いである。

➡ 水陸系統図





水陸両用MS&MA

カラー設定画&イラストラインアップ

このページでは宇宙世紀に登場した歴代の水陸両用モビルスーツ（モビルアーマー）のカラー設定画とイラスト一覧を掲載している。なお、本誌にて機体解説、紹介がされているものはページアイコンにて対応ページ数を記載している。



MSM-04
アッガイ

P048



MSM-03
ゴッグ

P032



MSM-07S
シャア専用
ズゴック

P038



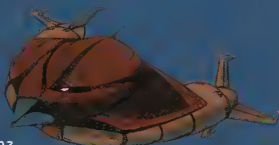
MSM-07
ズゴック

P038



MAM-07
クラブロ

P062



MSM-10
ゾック

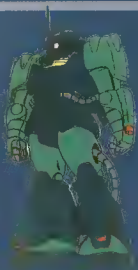
P060





RMS-192M
ザク・マリナー

P056



MS-06M (MSM-01)
ザク・マリンタイプ
(マリン・ハイザック)

P054



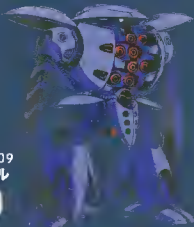
MSM-04N
アッグガイ

P050



AMX-109
カプール

P064



MSM-07E
エクスベリメント
ズゴックE

P040



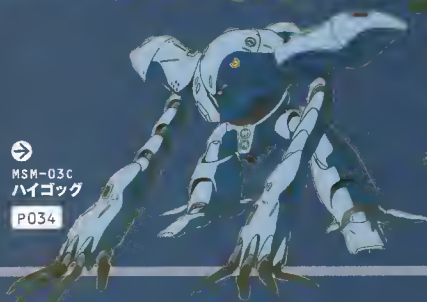
MSM-08
ゾゴック

P044



MSM-03C
ハイゴッグ

P034





ZMT-A31S
ドッゴラ

P071

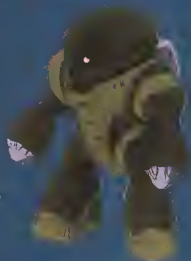


▲宇宙用カラー



MSM-04
アッガイ
(前08MS小隊版)

P048



ZM-S06S
ガルグイユ

P070



MSN-07D1
ゼーゴック

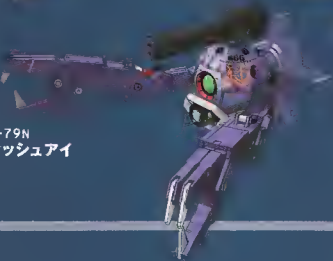
P042



▲ゼーゴック



RB-79N
フィッシュアイ



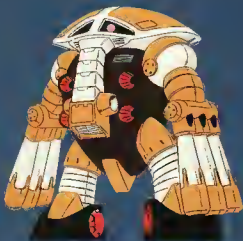
▲モビルダイバーシステム





MSM-04 G
ジュアッグ

P052



EMS-05
アッグ

P058



MSM-03-1
プロトタイプ
ゴッグ



MSM-02
水中実験機



RAG-79-G1
水中型
ガンダム

P069



RAG-79
アクア・ジム

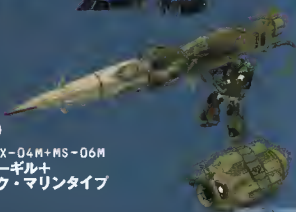
P068



F90M
F90
マリンタイプ



QEX-04M+MS-06M
エーギル+
ザク・マリンタイプ





性と戦略的価値

「歴史的背景」
**ジオンはなぜ地上用兵器を
開発していたのか？**

ジオン公国が本格的に地球連邦軍との武力衝突を考えたのは、いつ頃のことだろうか。政治的情勢を考えると、おそらく宇宙世紀70年代はじめだろう。では、具体的にはどの程度の武力衝突を考えていたのだろうか。それに対しては、いくつかの可能性を考えることができる。

1つは、戦場を宇宙に限定することだろう。新テクノロジーであるミノフスキー粒子下の新兵器、玉ビルスーツによって地球連邦軍に軍事を与え、一種の不可侵領域にする。そして、スペースノイド主導による宇宙での生活環境を確立するという考えがある。

宇宙世紀0079年1月3日、一年戦争の開戦から戦開の最初の1カ月は、そういった戦略を前提に行われていたフシが伺える。

しかし、歴史をみれば分かるように事はそれほど簡単には行かなかった。ジオン公国軍がすべての兵力を挙げて行った一週間戦争（1月3日～10日）、そして続くルウム戦役（1月15日～16日）という作戦行動において、その結果勝利はしたものの、大戦を短期間に終わらせるといふ目論見は、捕虜だったレビル將軍が連邦軍に帰還を果たし行っ





水陸両用
モビルスーツ小史

その誕生の必要

た「ジオン兵」の演説の前にも
ろくも崩れ去った。

そして宇宙世紀0079年3月1日
ジオン公国はなほ崩し的に地球陸上作
戦を展開。戦場は地球上へと拡大し、
その後、近海の戦況へと移るのだ。

このことからわかるのは、ジオン公
国は戦場を宇宙に限定する事を考えつ
つ、地球上全域を戦場にするという事
もまた、考えていたということだ。

その規模がどの程度であるにせよ、
少なくともジオン公国軍が、最初から
地球上にまで戦線を拡大させる意思が
あった事は間違いないだろう。それは、
本来ならコロニーでは必要がない兵器
を大量に開発・生産していた事から伺
える。ドップやド・ダイス、ガウ攻
撃空母のような航空兵力は、コロニー
という環境において、必要がないばか
りでなく、飛行実験を行うことすらま
まならない。

また、マゼラ・アタックやダブデ級
陸戦艇などの地上兵器も、コロニーで
はいたすに火力が強ければかりで、危
険な兵器である。つまり、ジオンの地
上用の兵器は、開発はしていたものの、
宇宙という戦場では活躍の場がほとん
どないのだ。これだけを見ても、ジオ
ン公国が本格的な地上戦を想定してい
たことがわかる。

しかしこれら地上用の装備の開発は、
並大抵の事ではない。何しろコロニー



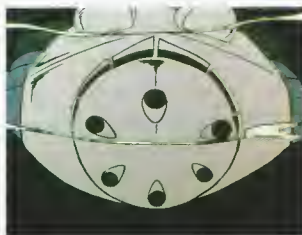
という環境では、実機による試験が難しい。おそらくその開発はコンピュータによるシミュレーションに頼っていたという状況であろう。このようなデータ主導の状況による開発は、地上で出会う様々な不測の事態において、対応できない機体を生み出す恐れがある。

また、運用には兵士たちの育成・訓練も当然必要になるが、これもシミュレーションが中心になる。さらにそのノウハウの確立もジオン公国軍にとって、負担になったはずだが、それを押してまで地上兵力を整備したという事は、本格的に地上を戦場にすると考えていたが、もしくは戦いは宇宙で済ませ、その後の交渉で、ある程度の地球上の領土の割譲を想定し、その駐留軍という役割をも視野に入れていたのかもしれない。

そういった意味では、地球降下作戦において、軍需産業や工場が集中していたとされるキャリフォルニアベースを手に入れた事は、重要な意味を持っていたと言える。むしろ、これこそジオン公国軍の地球侵攻作戦の正否を左右する事だったのかもしれない。

「歴史的背景」 なぜジオンは海上戦力を必要としたのか

この地球侵攻作戦からも分かるように、ジオン公国軍は海上戦力の整備も



視野に入れていたようだ。

戦略という視点で見ると、俗に陸海空軍と言われるように、海上戦力は主要な武力の一つであるが、同時に特殊な戦力であるとも言える。

実際、国家レベルの軍隊の整備状況を見ても、海軍力が充実している国家もあれば、それほどでもない国家もある。これはどういう事なのだろうか。それは、海の戦いの歴史を紐解いてみると分かり易い。

海の戦い、その発生する原因としては必ず「一定の条件が存在する。それは、海運が存在することだ。

古くは海軍と言えは、ギリシャ、ローマなどや、中国の水軍などがその端

緒であると言えるだろう。しかし、その時代において、わざわざ海戦で決着をつける必要はどこにあったのだろうか。大砲などが存在しない時代、海の戦いは、互いの船に乗り移る肉弾戦であり、船の勢力が及ばない場所に行けば無力化される。トロイ戦争のように異国の侵略の手段として船を使う場合もあったが、必ずしも船を使用する＝海戦というわけではなかった。

ではなぜ海の戦い起きるのか。それは海を制する事で戦いの趨勢を決めることができるからに他ならない。つまり、海の戦いで負けると、継戦能力に重大な影響をもたらす、という条件があつたのだ。それは、人類の構築した社会で、海が果たすもつとも大きな役割と不可分ではない。

海とは、食料資源の宝庫でもあるが、それとは別の利用法で、もつとも重要なものは物資の運搬、輸送である。海を行く船はものを運ぶ道具の中で、その速度はともかくとして、もつとも大量のものをもつとも効率よく運ぶことができる手段である。実際、現在の世界でも、重量のあるものや、容積のあるものの長距離輸送は、海が使用できる環境である以上、そのほとんどが海運が利用されている。

それゆえ、船を効率的に使用できる地勢においては、船を利用した流通のシステムが出来上がり、繁栄するのは





水陸両用MSを読み解く 5大特長

一年戦争時、シオン公国軍が用いた水陸両用機は、どれも優秀な機体だったといわれている。ここでは、その「優秀さとはどんなものなのか?」を5つの特長としてまとめてみた。

モデル：MSM-07ズゴック

① 大出力ジェネレーター

性能面において、他の機体よりも水陸両用機が優れている点がある。冷却に水を利用しており、その結果、高出力なジェネレーターが搭載でき、ビーム兵器も装備が可能だったというのもポイント。



② 首がない

とにかく、水中で行動する際には、余計な部分は減して、なるべく一体化されているのが望ましい。そうしないと水の抵抗が大きくなるし、水圧による機体の損傷にもつながりかねないのだ。



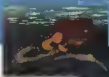
③ 手関節がジャバラ

人型のように各関節ごとのブロック構成ではなく、蛇腹状のユニット、フレキシブル・ベロウズ・リムで構成される。この機構により、ハイパー・ハンマーの一撃を受け止めたり、機体の跳躍などが可能である。



④ 耐圧ボディ

水中という厳しい環境に対応できるように、潜水艇と同様の耐圧船殻構造を機体に採用している。これによって水陸両用機の多くのシルエットが、丸みを帯びた球状となっているのだ。



⑤ 腕部クロ-

MSM-03
ゴックの
アイアン
ネイル



MSM-10
ゾックの
アイアン
ネイル



形状は様々だが、通常機のようにマニピュレーターではなく、アイアン・ネイルを採用している機体はほとんど。ただし、白兵戦における格闘的だったり、機体固定用、ブービーなど、その用途は様々



これに似ているのは、第一次世界大戦、第二次世界大戦のドイツだ。基本的に陸軍国であるドイツは、敵国であるイギリス程は海洋国家ではなかった。そ

「歴史的背景⑧」 水陸両用モビルスーツが必要となるふたつの戦場

しかし、ジオン公国は、制海権こそ必要だったものの、海運というロジスティックはそれほど重要視していなかっただろう。おそらく、補給は宇宙からするので間に合っていたであろうからだ。むしろ、地球連邦軍の海運による補給を阻止する事が、ジオンが作るべき海軍の求める姿であろう。

たとな、陸上の戦いで不利であっても、海路で武器や補給物資、新たな兵力を補給し続ければ、戦争は継続できる。もちろん近代以降の戦いにおいては、それには制空権の確保が必須となる。それだけではなくすべての船の往來を制限する事は不可能で、制海権の確保こそが重要なのだ。

歴史を見るまでもなく明らかだ。逆に言えば海戦が起これば、こういった船を使った流通システムが確立しているところである。つまり、それらを遮断することは、戦争継続能力を減じさせることに繋がるのだ。もちろん航路の確保は宇宙世紀の世界でも重要だったことは間違いがないだろう。

れゆえ海軍力は、イギリスの方に分かった。

こうした状況を打開するためにドイツ海軍がとったのは通商破壊である。つまり、イギリスをはじめとする連合国軍となるべく正面から戦わずに、輸送艦を少しでも多く撃沈する事で海運を妨害するのである。この作戦の主役になったのが潜水艦であるUボートだ。潜水艦は戦艦などに比べ安価に製造でき、隠密性が高く、通商破壊という任務にぴったりだった。つまり、海戦で制海権を得るという事を最初からあきらめ、ゲリラ戦法に徹したのだ。

これと同じ状況がジオン公国軍にあった。自軍にとっては敵の通商を破壊する事だけで海の戦いは事足りた。しかし、ドイツと違いジオン公国軍には、その手段をどう調達するかという問題があった。物資や装備、人員としての船乗りもほとんどいなければ、海上戦闘用のノウハウもないに等しく、訓練方法も限定される。組織的な海軍を作る事はほとんど不可能だっただろう。こうしたことを解決する切り札こそが、モビルスーツの水中利用という考えだったのだろう。

また、通商破壊と並ぶもう一つの命題は、いわゆる海兵隊的な水陸両用作戦である。

水陸両用作戦とは、いわゆる上陸作戦を指し、敵の支配地域に対して強攻



的に戦闘を行い、陸海空の兵力を投入する作戦である。これは、戦争自体を勝利に導くためには不可欠とも言えるものである。

その必要性は、宇宙時代には衛星軌道上からの降下作戦の登場により、機分減じていたであろうが、まったく価値がなくなっているのではないだろう。こうした部分を補完する事にも、ジオンはモビルスーツを使用する事にする。特に、その場所が不明であった地球連邦軍の根拠地・ジャブロー攻略は、密林であるアマゾンという地形上の問題もあり、水陸両用モビルスーツの重要性は大きかっただろう。

水陸両用モビルスーツが登場は、ジオンが地上で作戦行動を行うために、必要不可欠なものだったのだ。

水陸両用モビルスーツに求められる特殊要件とは？

人類初のモビルスーツ、ザクが、当初の仮想敵がモビルスーツではなく、宇宙戦艦や戦闘機であったように、水陸両用モビルスーツの仮想敵は、潜水艦や艦艇、そして対潜哨戒機の航空機であったはずだ。

そしてその求められる要件は2つ。1つは通商破壊に適した能力だ。これは海中での航行能力、潜航（潜水）能力、そして敵の対潜哨戒機や対潜艦艇に対抗する能力が求められた。

具体的には潜航能力は、一定の深度に耐えられる耐圧船殻、高速での潜航に必要なバフ、船を沈める武装が求められる。武装は、魚雷とミサイルなどが適当であろう。

それでも1つの要素である水陸両用作戦においては必要なのは、耐弾性能と火力、機動性だろう。しかし、耐弾性能を上げる事は、装甲の厚さが求められる重量が増す。火力は、この当時の最大の威力を誇る、ビーム兵器の装備が望ましい。その上で機動性を向上させるには大馬力が必要だ。



通商破壊作戦と水陸両用作戦に必要な要件は、ある部分は合致するが、相反する部分も多い。しかし、水陸両用モビルスーツは、それを高次元で両立することができた。それこそが、水陸両用機の成功の理由なのだ。

しかし、他の戦場と同じようにモビルスーツだけで戦力を整備するのは無理があった。それはジオン公国軍の方も分かっていたようで、地球降下作戦の折に、地球連邦軍の潜水艦を大量に手に入れた。モビルスーツの補給などの母艦として必要だったからだ。

制海権を手に入れた水陸両用モビルスーツ

結果的に水陸両用モビルスーツは、ジオンが短期間に海軍を整備するのに大きく寄与した。実際、その能力は想定以上とも言えるものだった事だろう。それは、宇宙世紀0079年8月11、14日に行われたミッドウェイ海戦で地球連邦軍艦隊はジオンの水陸両用モビルスーツ群に壊滅的な損害を被った。

連邦軍側には対モビルスーツ戦のノウハウはなかったはずで、一概に判断することは出来ないが、この戦いで少なくとも従来の海軍の従来の戦法では、モビルスーツに対抗できないと言ったことは証明された。また、その翌月の9月にはジオン海軍は大西洋の制海権をほぼ手中にする。

その後、11月にはアイルランドのベルファスト基地や、ジャブロー基地で水陸両用モビルスーツのもう一つの戦術目標である通商破壊作戦が展開される。この方々は敵側にもモビルスーツが配備されたことや、充分に戦力が足りなかったため、芳しい結果を残すことができなかった。

これら一連の戦いにおいて、水陸両用モビルスーツの弱点もまた、見えてきた。空からの攻撃に弱く、また空への攻撃力などは、少々難があった。モビルスーツ戦において、火力や武装面は有効だったが、機動性はそれ程でもなく、圧倒的有利足り得ない事などが挙げられる。

モビルスーツは、従来の戦術体系の中では突出した存在だが、モビルスーツ単体よりも、モビルスーツを中心に従来の兵器体系も利用しつつ戦力を構成する方が効果的なのは、一年戦争の地上戦において地球連邦軍が証明した。水上における戦いもまた、同様だったと言えるだろう。

水陸両用モビルスーツは、宇宙世紀80年代の後半以降、ガルダ級などの超大型輸送機の実用化や、モビルスーツの活動領域が空にまで及ぶに至り、その必要性は薄れていき、その用途は限られたものになっていく。やはり、一つの兵器体系だけが海軍を作るのは、無理があったのだ。



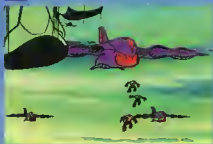


MSL 水陸両用 モビルスーツの戦場

水陸両用モビルスーツの実戦配備が確認されたのは、一年戦争も後期。オデッサ作戦も終了した後ということで大局的には大きな影響を与えたとは考えにくい、ジャブローなど投入された戦場では、その優位性が際立っている。ここでは彼らが活躍した主な戦場を振り返る。



A ジオン公国軍カリフォルニアベース



▲もともとは地球連邦軍の基地だったが、ジオン公国軍の第二次地球降下作戦によって占領される。その際、ユウコンをはじめとする潜水艦を奪われただけでなく、以後はジオン軍の拠点となる。

B 地球連邦軍ジャブロー基地



▲第二次0080年代中盤まで、地球連邦軍の本拠として機能していた基地。天然の巨大洞窟を利用して作られた同基地は、堅い岩盤に守られ、またその位置は厳重に秘匿されていた。

C 地球連邦軍北極基地



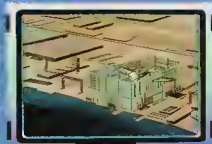
▲RX-78GP-1アレックスがジャブローと大規模な施設ではなく、小規模な北極基地から宇宙へ向けて打ち出されたのは、その行動をオン軍に気づけられないための措置だという。

D 東南アジア戦線



▲第二次0080年代後半、ジオン軍のサラム開発基地があり、終戦前線まで連邦軍とジオン軍の小競り合いが展開していた。遠東というところで、水陸両用モビルスーツも有効に機能した。

E 地球連邦軍ベルファスト基地



▲北アイルランドにある同基地は、ヨーロッパの大部分はジオン公国の勢力圏にあり、同基地は連邦軍の生命線だったのだらう。基本的には補給基地だが、重要な防衛ラインが引かれていた。

F 大西洋上空



▲シャア・アザムベ向かうホライムズベース、ナガン・ブーンの追撃部隊が会戦した。上での戦闘ということで、水中用モビルスーツが活躍する場面は少ないと思われた。



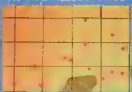
ベルファスト襲撃

U.C.0079.11.19 ~ U.C.0079.11.21

第2陣



▼北西部のエリア22からスゴックが侵入。ゴックより速い機体であることが判明されている。



▲海上ではゴックがGアーマを攻撃。だが、放棄を心得たムロに、あっさりと撃退される。



▲一時的な停戦で、ゴックは作戦を変更する。水陸両用型のパワーを発揮される。



▲ゴックが上へ攻め上げた瞬間にガンキャノンの砲撃を受け、ガンダムに切断されてしまう。



▼ガンダムを引きつったまま海中へと飛び込む。パワーで有利な戦況を作り出す。

さらに2日後、ホワイトベースの行く先を探るべく、スパイ107号を潜入させるための陽動作戦を展開。スゴック・ゴックでベルファストを襲撃した。この作戦で4機の機体を失い、責任を感じたフラナガン・ブーンは、さらに大西洋上で追撃作戦を志願する。

ジャブローへ向かう前に、ベルファストで応急修理をする。これになったホワイトベースだが、復活したシヤアのマッド・アングラー隊がこの動きをキャッチ。宇宙世紀0079年11月19日、まずは上陸した船がホワイトベースであるかを確かめるために、2機のゴックが先行して出撃した。

一年戦争においては、オデッサ作戦を終えたホワイトベースの補給を行つた基地であり、ヨーロッパのほとんどもをジオン公園軍に掌握されていた連邦軍にとつて、残された数少ない拠点であった。会談の中で「補給基地」という表現があり、特に補給という目的に特化した基地だった。

21世紀では北アイルランドの首府であったベルファストは北西の入江にあり、ちょうど現代ではジョージ・ペスト、ベルファスト、シティ空港と呼ばれる空港があり、これがベルファスト基地の前身となった可能性もある。

補給基地への奇襲で真価を発揮した水陸両用型

参加人員

シヤア・アズナブル/ブナガン・ブーン
コカ・ラサ・マーサ/カラハ/コナリ

投入モビルスーツ

ゴック、ズゴック

第1陣



▼エリア22から進入するゴック2機。同時にユーコンからエリア22へ侵入。



▲海中に設置された機雷でも、大きなダメージは受けないゴック。さらにフリンジャーヤードを放棄し無力化する。



▲アムロ・レイ、G.I.の2機はビーム・キャノンで艦上での機動性が低いゴックだったため、Gフルで対応できたのかもしれない。



▼ヒーム兵器の使えないガンターはハイパー・ハンマー装備で出撃。だが効果的なダメージを与えない。



▲ドラッグ・ゴックは材料の中へとガンダムを引き込むが近接戦闘で敗北を喫する。



ジャブロー攻防作戦

U.C.0079.11.30

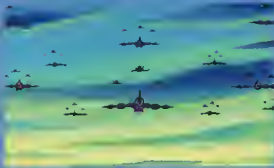
参加人員

シャア・アズナブル/ボウズキニフ・リー・ホッソ/ジツタル

投入モビルスーツ

シャア専用ズゴック/ズゴック/ゴック/メック/ザク/ドム/グフ

シャアの機動隊に、飛来するザク部隊。ジオン軍の地上に降った大敵の戦力であったとさえ思われる。

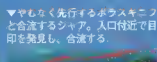


▲シャアの機動隊は水中から侵入する予定だったが、ズゴック部隊は水中から侵入する予定だったと考えられる。

▼ジャブローに降下できたジオン側のモビルスーツはわずか28機。シャアが降下中に敵軍の侵入を防ぐ。



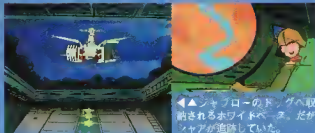
▲降下中に対空砲火で撃破されるズゴック。シャアは機を2機とも失い、作戦の方向転換に迫られる。



▼やもなく先行するボウズキニフと合流するシャア。入口付近で目印を発見し、合流する。



▲先行するボウズキニフ、ゴラフと合流したシャア。敵軍の侵入を防ぐ。シャアはズゴック部隊の侵入を防ぐ。



▲シャブローのドックへ取囲まれるホワイトベース。だがシャアが追跡していた。



▲先行するボウズキニフ、ゴラフ部隊。正確なシャブロー入口を突き止めるため、本陣に先駆けて調査を開始する。



▲シャブローの入り口を突き止める。ボウズキニフ、ジオン軍の侵入を防ぐ。シャアはズゴック部隊の侵入を防ぐ。

▼シャブローの入り口を突き止める。ボウズキニフ、ジオン軍の侵入を防ぐ。シャアはズゴック部隊の侵入を防ぐ。

この時点で連邦軍サイドはジオン軍の定期パトリールであるとの判断を下し、基地の正確な位置を憶えられないために攻撃は行われず、第二戦闘態勢を取るにとどまっている。

それからわずか1時間で、キャリフォルニアベースからジオン公國軍の援軍が到着。かねてからジャブロー攻撃の準備を進めていたため、その対応は迅速であったが、オデッサ後ということもあり、ジャブローを落とすには戦力不足であることは否めない。

加えて強攻策であった側面もあり、本来は河川から進入するはずのズゴック部隊が、ガウから降下を強いられてい

ジャブローの入り口を突き止める。ボウズキニフ、ジオン軍の侵入を防ぐ。シャアはズゴック部隊の侵入を防ぐ。

シャアはここでキャリフォルニアベースへの援軍を要請。到着までの間に、マッド・アンクラー隊が地上からのジャブローの入り口を突き止めるべく、ズゴックとゴック2機が斥候として出撃する。そしてジャブロー基地の南プロック第231ハッチ、第243ハッチを突き止める。

マッド・アンクラー隊はスバイ107号からホワイトベースの行く先が「南米の宇宙船ドック」という情報を得て、その行く先を密かに追跡。これまで定かではなかった地球連邦軍本部ジャブローの正確な位置を突き止める。

ジオン悲願の攻略作戦は、計画よりも小規模に終わる。





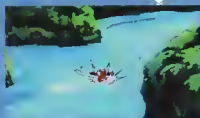
▲「……ロケット……」と叫ぶ。何だ！ 確信した。だが、アムロの成長は予想以上だった。



◀ウッティのゾム・マーンの攻撃より、スゴックのモノアイをつぶされるアクシデントが……



◀シャアはボラス・キニフに敵を任せると、ゾックは支援用であり、至近距離でガンダムへの対応にまわった。



◀ガンダムの沈没を切り切り、水中へ脱出したシャア。グロウ攻撃作戦は失敗した。



▲ベルファストでの海軍艦隊からガンダムはGブルで出撃。だがガンダムへの敵艦準備も指示しておく。

▼下流の入り口から侵入したゴック2機は、ホワイトベース隊の待ち伏せを受け、あえなく撃墜される。



▲「……」と叫ぶ。シャアは、決死打にはならなかった。目指す、シムの逆襲も、決定打にはならなかった。



◀Gブルから決まったガンダムがシム専用スゴック攻撃。ほぼ互角の戦いが展開する。

▶シャアはガンダムの対応に追いつく。早くも僚機を失ったことが作戦に影響していく。



る。ジャブローへ到着できたはずが28機。これには過半数の将官「ジャブロー全体を攻撃するには少なすぎる」と余剰を見ている。

実際、ジオン公国軍側もジャブロー全域を攻撃するのではなく、マッド・アングラー隊は宇宙船ドッグ、すなわちホワイトベースに狙いを定めている。

本来、シャアは2機のズゴックを随伴し、ドッグを急襲する予定だったが、降下中にリー・ホアン、ジツタルの搭乗するズゴックが破壊、やむなく先行するゾック、ゴックと合流し、二手に分かれて宇宙船ドッグを目指した。

首尾よくホワイトベースを発見したシャアだが、その前に立ちちはたかったのは、またもやガンダムであった。シャアとはいえ、相手がガンダムとなればその対応に追われる。予期せぬファン・ファンとの攻撃でモノアイをつぶされるというアクシデントもあり、この奇襲は失敗に終わった。

そもそも随伴する機体が支援用のゾックのみでは如何ともしがたく、もしこれがズゴック2機を機しての奇襲であったなら、結果はまた変わったものになったかも知れない。

からくも脱出に成功したシャアであったが、すでにキャリフォルニアベースからの援軍は全滅しかけていた。それゆえ、シャアは異なるアブローチで宇宙船ドッグの破壊を狙う。

……

ジャブロー・ジム工場破壊作戦

U.C.0079.11.30

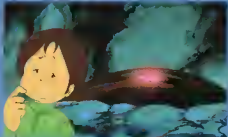
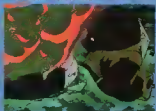
参加人員 ➡ シャア・アズナブル、アカハナ・ラジム、パイフ

投入モビルスーツ ➡ シャア専用スゴック、アッガイ

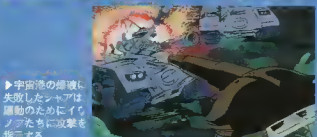


▲シャア率いる特殊部隊は、少数の工作員で潜入。宇宙港とジム工場を破壊することを計画する。

▼ポイントB3から侵入するアッガイ。ジャブローへの大原爆作戦から間を置かず再攻撃を仕掛ける。



◀あやうく子供たちに気づかれそうになるが、形状と色でカモフラージュに成功する。



▶宇宙港の爆破に失敗したシャアは、運動のためにイム・アタたちに攻撃を指示する。



▲攻撃するガンダムは、アッガイを撃破し、スゴックの左腕を奪う。シャアは地下水脈へ幸くも脱出。

▼当初からモビルスーツ戦は不利と考えていたシャアは、ガンダムの出現に迷わず撤退命令を下す。



ジャブロー攻略第二陣は潜入作戦

ジャブロー攻略の大部隊を失ったジオン軍は、ジャブロー内に潜入し、モビルスーツ工場、宇宙船ドックに時限爆弾を仕掛け、爆破することを目指す。すでに第一次攻撃の段階で戦力の消耗の激しかったジオン公国軍では、ジャブロー全滅の破壊を目指してはならず、連邦軍の宇宙への窓口である宇宙港の破壊。今後の要となるジム工場の破壊に目標は絞られていた。シャアは専用のスゴックと、工作員を搭乗させた4機のアッガイをジャブロー内に潜入した。だがその行動はすぐさま察知され、さらにガンダムの急襲を受け、アッガイ部隊は全滅するという最悪の結果となった。

大西洋追撃戦

U.C.0079.11.24

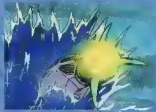
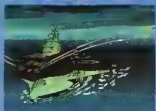
参加人員 ➡ フランガン・ブーン他

投入モビルスーツ ➡ グラブロ/ズゴック

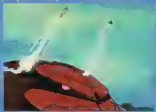


▲4機のモビルスーツを失ったブーンは、シャアにグラブロの機体も本艦下の戦いのため自ら出撃する。

▼海軍艦を迎撃し、ホワイトベースを追跡するシャア。海上で接触。行方不明となり戻ってくる。



▼対空ミサイルで攻撃するグラブロ。海中/海上での戦闘ならば、この時代で最強と呼べる兵器である。



▲ビームの被害を考慮し、海上へ身を乗り出して射撃を行う。それが艦本の戦い方だっただろう。



▶脚部を失っても拘束が解かれたガンダムはサーベルで装甲の薄いモビルスーツを貫く。



大西洋上で展開する追撃戦

連邦軍ベルファスト基地への攻撃で、ズゴック3機、ゴッグ1機を失ったマッド・アングラー隊。フランガン・ブーンはこの結果に責任を感じ、自らグラブロを駆って出撃する。ズゴック2機を喪失したグラブロは、大西洋上でホワイトベースに追いつく。海上では水陸両用モビルスーツをたないホワイトベースにとっては極めて不利な状況で、ガンダムを水中で運用するという荒業に出る。水中ではビームも威力を発揮できない。グラブロは動きの悪い機体をクロウで捉えるが、足が切断された隙をついて、ガンダムを仕掛けられ、ビーム・サーベルに貫かれた。

北極基地襲撃

U.C.0079.12.02

参加人員 ➡ ハイパー・シュライナー/ミハイール・カミンスキー/ア

投入モビルスーツ ➡ ズゴックE / ハイゴッグ



▲ミサイルを機体へ成功するサイロロブス。侵入と同時に、ミサイルは分かれ、RX-78NT-1を攻撃する。



▲機体のシムの迎撃で、アンティは命を落とす。隊長のズゴックEが駆けつけるが、一歩遅かった。



▲ミサイルの迎撃の遅いもあるが、改良された機体同用モビルスーツで終結を遂げた。

北極基地への奇襲も失敗に終わる

連邦軍が北極基地でRX-78NT-1の開発を行っている情報を得た連邦軍は、特殊部隊サイクロプス隊を派遣。同機を奪取を目論む。ユニオン級潜水艦U-99は、宇宙世紀0079年12月9日、ノバヤゼムリヤ基地を出港。翌9日、ズゴックE 1機、ハイゴッグ3機という編成で出撃したサイクロプス隊は二手に分かれ、一方は海底通路から潜入し、もう一方は正面から機動を仕掛ける。だが、すでに格納庫にRX-78NT-1の姿はなく、シャトルにて宇宙へ打ち上げられる直前だった。ロケット弾で発進を阻止しようとするも、護衛のシムに阻まれ、奪取作戦は失敗に終わる。

東南アジア戦線

U.C.0079.-.-

参加人員 ➡ 不明

投入モビルスーツ ➡ アッグ



▲機体のシムにアッグが、戦艦ガンダムの機体を吹き飛ばす。さらにコクピットを叩きつぶす。

▼空挺作戦で降下しに降下したカレン機。だが直後にアラートがその接近を知らせる。



▲アッグの機体は、ミサイルを叩きつぶす。だが、ミサイルの本体は、トラップが注意をそらす。だが、メインカメラを失い、スコープもきかない陸戦型ガンダムでアッグを扱うことができない。急遽エドアが目標で誘導、アッグをビームで貫く。



傷ついてもその力は侮れず

一年戦争後半に戦場へと投入された水陸両用機のアッグは、潜水艦部隊だけではなく、一部はアジアの戦地でも配備された。コジマ大隊所属の第08MS小隊は、空挺降下によって敵基地の所在を突き止める作戦を展開。先行して降下した1機の陸戦型ガンダムは、水中からアッグの接近を察知し、一撃で吹き飛ばした。アッグは右腕を破損したまま出撃している。このアッグは右腕を破損したまま出撃している。南アジア戦線の困窮した状況がうかがえる。



一年戦争における宇宙用・陸戦用のモビルスーツのなかで、ジオン公国軍

一年戦争随一の高性能対決!



ズゴック VS ガンダム

究極の量産機であるズゴックはプロトタイプのカンダムとほぼ互角!

RX-78 ガンダム

180m	頭頂高	183m
41.2t	本体重量	82.4t
58.8t	全備重量	159.4t
1250kW	ジェネレーター出力	1740kW
56,500kg	スラスター総推力	121,000kg
チタン系合金	装甲材質	超硬スチール合金

バルカン砲×2、
ビーム・ライフル、
ビーム・サーベル、他

アイアン・ネイル×2、
頭部6連装ミサイル砲、
メガ粒子砲×2

MSN-07 ズゴック

のMS・14ゲルググが登場するまで、もっともその性能が高かった機体が、地球連邦軍のRX-78ガンダムである。そのガンダムの特徴とは、大まかにあげて3つある。教育型コンピュータの

採用と、ルナ・チタニウム合金の軽量かつ堅牢な装甲、そしてビーム兵器の携行だ。その結果、総合性能で同時期のMS・06ザクIIを大きく上回る性能を見せることになり、一種の戦場伝

説と化した。
しかし、ここで忘れてはならないのがRX-78とは、あくまでプロトタイプであり、少数しか生産されなかった事。一方、MSN-07ズゴックは、ある意味、量産モビルスーツとしては究極の性能を見せている。
まずはその両者の性能面を比較してみよう。ガンダムのジェネレーター出力は1380キロワット、対するズゴックは2480キロワットと、実に1100キロワットもの差を付けている。これを出力/重量比で比較すると、ガンダムの1トンあたりの出力は約23ズゴックのそれは約26と、1割程度ズゴックが優る。ちなみにザクの場合は14.5、ゲルググの場合19.6なので、ガンダムとズゴックの差は実際の作戦行動においては、それ程差がなかった可能性が高い。

水陸両用機の実力とは!?

水陸両用機のライバル機たちと水陸両用機の性能を比較テスト

モビルスーツとしては特異な存在である水陸両用機。実際の所その実力とはどの程度のものであったのだろうか。ここでは、一年戦争におけるライバルである地球連邦軍の機体たちと比較してみよう。



一方スラスタ推力は、ガンダムが5万5千500キロに対し、8万300キロ。同じく1トンあたりではガンダム925キロ、対するズゴックは861キロと、ガンダムが上回るが、やはりその誤差は1割に満たない。これは単純計算ではあるものの、ガンダムとズゴックの性能差はほとんどないと言えるだろう。

武装面では互いにビーム兵器を装備している事も同じ。ビーム兵器は出力の余剰分を一部転用していることを考えると、出力/重量差から、能力はほぼ互角と考えるべきだろう。補助兵装としてガンダムには60ミリバルカン、ズゴックにはミサイルがあるが、こちらの威力はズゴックに多少のアドバンテージがあるだろう。近接兵器のビーム・サーベルとクローでは、ビーム・サーベルの方がリーチが長く、ガンダムが有利だ。装甲に関しては、いかにルナ・チタニウム合金といえどビーム兵器の前には無力に近いので、若干有利といった程度だ。

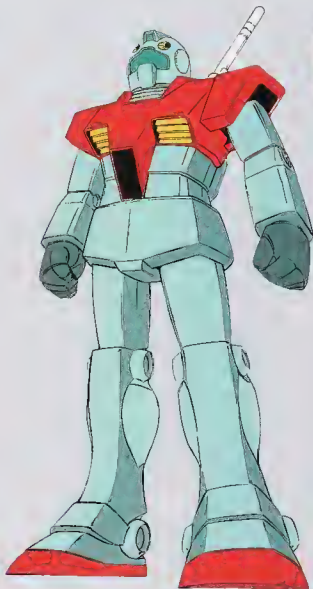
総体的にはこの2機の能力はほぼ互角といっている。実際には、ジムもそれ程差がないだろう。

もし勝負となれば、状況やパイロットの技量、戦法の勝負となるだろう。それでも水陸両用型のズゴックは、冷却系に不安を抱えているはずで、長期戦は控えたい所だ。



ゴッグ VS ジム

性能的にはジムの圧勝だが
ゴッグの重装甲を活かせば……



重いゴッグに軽いジム 性能差は歴然……

史上初の水陸両用機であるゴッグ。対戦末期に戦線へと投入された地球連邦軍の主力モビルスーツであるジム。実際に戦場でもつとめ戦闘が行われたであろう組み合わせといえるだろう。

ここでは主に地上での戦いについて考えてみよう。まずは前項のようにそのスペックから比較してみたい。ゴッグの出力は1740キロワット。1ト

ンあたりの出力は約11。推力は12万1000キロで、1トンあたりは約759キロ。これに対しジムは出力1250キロワット。1トンあたりの出力は約2。推力は5万5000キロで、1トンあたりは約944キロと、どちらを取っても大幅にジムの方が上回っている。つまり、性能的にはジムの圧勝なのだ。ズゴックと違い、ゴッグは完全な水冷式のモビルスーツだ。ゆえに水上での行動時間はそれ程長くないはずだ。そういった面でも、ジムの方

が圧倒的に有利だ。加えてビーム兵器の威力もゴッグがジムを大幅に上回るということはないだろう。

しかし、ゴッグがジムよりも大幅に上回っているものがある。それは装甲の堅牢さだ。ゴッグとジムが戦うシチュエーションを考えると、おそらくゴッグによる強襲上陸作戦時における遭遇戦だろう。そのような場面においては、ゴッグはその重装甲で、ひたすら敵側の砲撃に耐え、ズゴックなど、地上部隊なりの支援を待つのが上策。言い換

MSN-79 ジム		MSN-03 ゴッグ	
180m	頭頂高	183m	
41.2t	本体重量	82.4t	
58.8t	全備重量	159.4t	
1.250kW	ジェネレーター出力	1.740kW	
55,500kg	スラスタ総推力	121,000kg	
チタン系合金	装甲材質	超硬スチール合金	

バルカン砲×2、
ビーム・スプレガン、
ビーム・サーベル、他

アイアン・ネイル×2、
腹部メガ粒子砲×2、
腹部魚雷発射管×2



えれば、そこそがゴッグの役割といえる。ただし、自慢の重装甲もビーム兵器の前で、どれほど効果が発揮でき

るかは疑問も残る。

一方で、水中戦となると、ライバルとなるのはRX-79アクアジムだが、

こちらの方は、スラスター推力で圧倒的にゴッグが有利であり、より水中機動に最適化された形状もあり、アクア・

ジムはゴッグの敵ではないだろう。水中戦用に特化したゴッグと、水中も使える程度のジムの差ともいえる。



アツガイ VS 陸戦型ガンダム

アツガイが
ガンダムに勝つ！
金星の可能性も……



以外にも高い！
アツガイの性能

MS-06ザクⅡのジェネレーターや部品を使い、廉価版の水陸両用モビルスーツとして開発されたアツガイ。その性能面はゴッグよりも優れた点が多い。だが、それでも廉価版として扱わ

れたという事は、見た目のスペック以上に問題も多かったのだろう。

さて、ここで比べると、東南アジア戦線で一戦交えたRX-79[G]陸戦型ガンダムだ。プロトタイプであるRX-78ガンダムより、実質的にはRGM-79[G]陸戦型ジムの上位機という位置づけと言える機体だ。

まずはざっくりと性能を比較してみよう。アツガイの出力は1870キロワット。1トンあたりの出力は約19。推力は10万9600キロで、1トンあたりは約1127キロ。これに対し陸戦型ガンダムは出力13500キロワット。1トンあたりの出力は約18。推力は5万2500キロで、1トンあたり

RX-79[G] 陸戦型ガンダム		MSN-04 アツガイ	
180cm	頭頂高	192cm	
520kg	本体重量	916kg	
730kg	全備重量	1290kg	
1,350kW	ジェネレーター出力	1,870kW	
52,000kg	スラスター総推力	109,600kg	
ルナ・チタニウム合金	装甲材質	超硬スチール合金	
バルカン砲、 ビーム・サーベル×2、 100mmマシンガン、他		バルカン砲×4、 6連装ミサイルランチャー、 メガ粒子砲、他	

は約712キロ。意外な事に総体的にはアツガイの方が優れているという結果である。

また、アツガイはビーム兵器を搭載しているのに対して、陸戦型ガンダムはビーム兵器を使用することは出来るが限定的だと思われる。基本的にはマシンガンなどの実体弾兵器をその装備の中心としている。陸戦型ガンダムのルナ・チタニウム合金は、さすがにビーム兵器に対する耐弾性はそれほどでもなく、それに対し、アツガイの方は水陸両用らしい重装甲を纏っているため、実体弾兵器への耐弾性は、少なくともザクレベルよりは上回っていると考えられる。

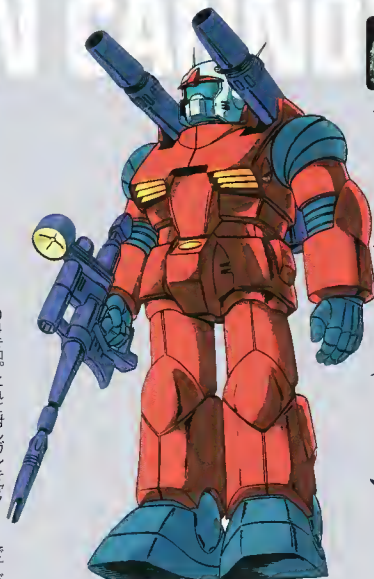
もちろん、戦況や条件、水冷エンジンを積んでいるアツガイの地上での行動時間の制限など、様々なファクターはあるものの、意外や意外、アツガイが陸戦型ガンダム相手に金星を挙げることが性は少なくはないのだ。





ゾック VS ガンキャノン

技のガンキャノン、力のゾック
コンセプトの違う2機



支援の質が違う!? 両機の武装構成

さて、対決コーナーの掉尾を飾るのは支援用モビルスーツ対決だ。この2機種ががっぷり組んで戦う可能性はほとんどないが、まずは一応その性能を比較してみよう。

ゾックの出力は3849キロワット。1トンあたりの出力は約17。推力は10万9600キロで、1トンあたりは約

1104キロ。これに対しガンキャノンは出力1380キロワット。1トンあたりの出力は約18。推力は5万2500キロで、1トンあたりは約740キロ。出力比はほとんど同等、推力は1.5倍となる。さすがに劇中でゾックのジャンプ力はザクの数倍と言われるだけのことはあるが、実際数値を比較してみると、ザクの重量/推力比は約645。ゾックのそれはザクの1.7倍という結果になる。実際の性能は数値

ですべてを表せるものではないが、3倍はちよつと評判先行だろう。その噂をいぶかしんだあたり、さすが赤い彗星のシャアといったところだ。
さて、ゾックとガンキャノン、双方とも支援型（砲撃型）であるから、直接撃ち合うという状況はちよつと考えにくいので、砲撃支援型としての性能を比べてみよう。
ゾックはメガ粒子砲を8門と強力だが、実質的に使用できるのは、前後面

RX-77 ガンキャノン		MSM-10 ゾック	
17.5m	頭頂高	239m	
510t	本体重量	1676t	
700t	全機重量	2290t	
1.380kW	ジェネレーター出力	3849kW	
51800kg	スラスター総推力	23000kg	
ムナ・チタニウム合金	装甲材質	チタニウム合金	
バルカン砲×2、 250mmキャノン砲×2、 ビーム・ライフル、他		頭部フォノン・メーザー砲、 肩部メガ粒子砲×8	

のどちらか4門となる。これは巨大な体の機動力不足を解消するための措置と言えらう。

一方でガンキャノンの主武装は、実体弾兵器である240ミリ無反動砲2門と、長距離射撃用ビーム・ライフルが1門だ。総合的な火力の面だけで見るとゾックに軍配が上がる。しかし、ガンキャノンの無反動砲は実体弾で、榴弾や焼夷弾、徹甲弾など用途に応じて弾種の変更が可能だろう。ビーム兵器が苦手とする遮蔽物をまたぐ山なりの曲射砲撃も可能だ。また、副次的なビーム兵器も総体的に作戦で柔軟性を持たせられる。もちろん、ゾックはサポート役にゴッグなりズゴックなりが随伴するので、それらを活用すれば柔軟な作戦行動が可能だ。

総合的には、ジムを中心に機動性と柔軟性のあるガンキャノンと、長距離砲撃のガンタンクを擁する連邦軍の方が、ゾック、ゴッグ、ズゴックの組み合わせのジオン軍より、広いレンジで柔軟な作戦を展開できるだろう。

懐の深い展開力を持つ連邦軍に対して、ジオン軍は正面突破を強いられるかもしれない。



ゴツグ系

重装甲に身を包んだ初期水陸両用モビルスーツの傑作

ツイマッド社の装甲技術を生かしたゴッグ。様々な問題点を抱えていたといわれるが、重装甲をはじめとする多くの長所で、圧倒的な存在感を示した。

通商破壊で能力を示し、モビルスーツ戦にも対応

ジオニックス社でスタートした「モビルスーツ（ザン）の水中対応」というプロジェクトは、ザク・マリントンタイプによる各種実験を経て、ツイマッド社にも基礎データがもたらされた。

その後のジオニックス、ツイマッド、MIP、各社の水陸両用モビルスーツ開発はほぼ同時期にスタートしたと考えられるが、ゴッグはMSM-03の型式番号が示すとおり、中でも比較的初期に開発が行われたと考えられる。それはゴッグのコンセプトからも推測できるだろう。

水中での巡航に適した構造や、腹部に武装を集中した構造は、陸上では射角に制限がある。また、面を意識した

クローも艦船の船体にダメージを与えることに適しており、こうした要素からゴッグが海中での行動を主とし、通商破壊を強く意識した機体であることがわかる。

開発時点で連邦軍のV作戦の情報を知ったジオン公国軍がキャッチしていたかは不明だが、ゴッグは対モビルスーツ戦をそれほど考慮していなかったことがうかがえる。

それでもベルファストにおいて、ガンダムと五角以上の戦闘を展開した背景には、水陸両用モビルスーツがもつポテンシャルの高さゆえだろう。ハイパー・ハンマーを両手で受け止めたバウ、アムロにビーム兵器がなければ通用しないと判断させた重装甲。アムロが初めて遭遇したゴッグは、グフやドムと違った衝撃を与えた。

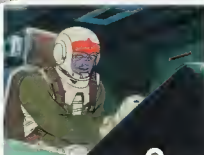
重装甲モビルスーツの完全な定評のあるツイマッド社の技術が生かされ、既存兵器の攻撃は全く通用しなかった。これはパイロットにとっても、大きな安心感につながったはずだ。

こうしたゴッグの特性は、意外な点とともに「統合整備計画」において大きな転換を迫られる。陸上での運動性を重視した機体構造への見直し、頭部にミサイル発射管、腕部にビーム・カノンを移植させた構成は、ズゴッグに近い。いわばツイマッド社製のズゴッグといえる構成となった。

これは連邦軍のモビルスーツ配備が一般的になり、ゴッグに要求される性能が変化していったからとも考えられる。ゴッグの初期コンセプトは、時代の要求が生んだ一瞬の輝きだったのかもしれない。



⇒ コクピット

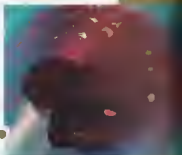


機体中央部に設置される一般的なモビルスーツと同様、機体中央部に備える。重装甲であるため、機雷が爆発した際の衝撃も伝わりにくいのかもしれない。

⇒ 顔部

頭部は非可動
モノアイ可動範囲も制限

水陸両用機では珍しく広範囲のモノアイレールを備えていない。先端部には、水中の機雷や爆雷を無効化するフリージャーダ発射口を備える。



⇒ 武装

腰部に武装を集約

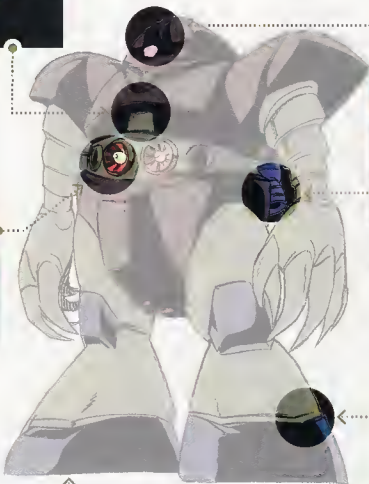
腰部が武装ユニットがされており、2門のメガ粒子砲と2門のミサイル・ランチャーを備える。だが射角の自由度は低く、ハイゴッグではスゴックに近い武装の配置に。



⇒ ジェネレーター

専用の水冷式動力ユニットを搭載する

水陸両用モビルスーツ専用開発された水冷式ジェネレーターを搭載。冷却面では有利で、ビーム兵器の使用も可能となったが、冷却水のために重量は増加。



⇒ ランドセル

機体各所に
推進機を備える

ランドセルに熱核ジェットエンジン、胴部にハイドロジェットエンジンを搭載。脚部にも推進ユニットを備える。ハイゴッグではオプションのジェットバックが用意されていた。



⇒ 脚部

陸上には不向きな歩行ユニット

各関節にはシーリング処理が施される。あまり歩行には向かず、陸上での機動性はそれほど高くない。後継のハイゴッグでは、大幅に構造が改められる。



スゴック系の進化

U.C.0079
MSM-03C
ハイゴッグ

統合整備計画に則って改良。運動性を重視し、武装の配置も変更するなど大規模修を受け。



U.C.0079
MSM-03
ゴッグ

イママト社開発の水陸両用モビルスーツ。特に通商破壊や拠点攻撃に向く機体であった。



U.C.0079
MSM-03-1
プロトタイプ
ゴッグ

すでにゴッグの基盤は完成している。腰部に着弾式のミサイルポッドが搭載可能であった。





■ MSM-03

ゴッグ

Spec

頭頂高：18.3m
 本体重量：82.4t
 全備重量：159.4t
 ジェネレーター出力：1,740kW
 スラスター総推力：121,000kg
 装甲材質：チタン・セラミック複合材
 武装：アイアン・ネイル×2
 腹部メガ粒子砲×2
 腹部魚雷発射管×2
 フリージーヤード

装甲

深度200mの水圧にも耐える
 はか率向搭載のバルカン砲で
 は破壊が困難なほどの重装甲
 となっていた。材質はチタン・
 セラミック複合材。

魚雷発射管

腹部に大型の魚雷発射口を持
 つ。船舶に向けて撃つには一
 度姿勢を起こす必要があるが、
 スコックでは改良され頭頂部
 に発射口が設けられている。

モノアイ

ズゴックやアッガイ
 にくらべ、カメラや
 センサーの搭載範囲
 は限定される。



胸

フレキシブル・ヘロウズ・リ
 ムと呼ばれる多関節を用い
 た伸縮可能な構造を持つ。航
 行時に締めて水の抵抗を減ら
 す他、格闘戦時にクローを扱
 いやすくするメリットもある。

腹部メガ粒子砲

メガ粒子砲の収束率は高くは
 ないが、同じジオン社製の
 ドムの胸部拡散ビーム砲より
 ははるかに強力。

アイアン・ネイル

手のひらのような形状が可動範
 囲は極めて狭く、マニピュレー
 ターとしての機能はない。その
 分硬度は非常に高く、ガンダム
 の装甲にすら穴を開けた。

体形

航行時の抵抗を減らし、水深
 の圧力に耐えるため全般的に
 ずんぐりとした曲線的な姿を
 持つ。

武 装

ゴッグは「内蔵式メガ粒子砲を搭載した初の
 モビルスーツ」であるが、機体の使用方法（海
 中から艦船を攻撃する）から、光学兵器の活
 躍の場は少なかった。ただし、照射範囲は広
 いが威力は高くないため、沿岸施設の占拠な
 どを行う際には、施設をあまり手ひどく破壊
 せず、結果的には有用に働いた。



フリージーヤードを装備
 するのはゴッグのみ。た
 だし機体の防水性能に懸
 念をもちつつも。



威力は高くなくとい
 っても、車両を破壊する
 には十分すぎる。



vsRXシリーズ

RX-78ガンダムと対戦したときはハイパー・ハンマーすらやすやすと受け止める、すさまじいパワーを見せ、機雷や車両からの攻撃にもびくともしなかった。しかしビーム・ライフルにはたやすく自慢の装甲を貫かれるため、陸上では動きが鈍くなりがちなゴッグは、これらの装備を持つ機体には「いい的」だろう。



武装は、水中から艦艇を攻撃するた

めの魚雷のほか、巨大なアイアン・ネイルを装備している。また、ゲル状の物質を海中に放出し、機体のまわりに漂わせるフリージャーヤードで、機雷をある程度無知止することもできた。

MSM-03ゴッグは、水陸両用でビルスツツである。その開発はツィマット社が担当しており、同社がドムに採用した熱核ホバー・ジェット・エンジンを転用した熱核水流エンジンを搭載することで、高推力を実現。水中では最高速度70ノット（時速約130キロ）で航行でき、また水中での機動性も良かった。

ボディのモノコックシエルは耐圧殻兼装甲であったが、頑強さを求めたため機体は重く、本体重量は約80トン、装備重量にいたっては約100トンにものぼる。これはザクなどのモビルスーツの2倍以上だ。

潜水能力と航行能力を武器としてメガ粒子砲が挙げられるが、これはジェネレーターの冷却に水を利用するというシステムの採用により、大出力化に成功した。だが、その反面機体全体における装備重量の増大を招いた。それでもメガ粒子砲の収束率が低いため威力も高くはなく、加えて水中では減衰するため、実際の戦闘でどのくらい効果があったかは疑問が残る。

潜水能力、航行能力や武装などゴッグが持つこれらの要素から考察すると、ゴッグの主な用途は水陸両用と言っても水中で戦ったと言えるだろう。海上

め、上陸後の機動戦闘は、様々な制約を受けただろう。こうした性能面のマイナス要素が、ゴッグに水陸両用機として劣った機体というレッテルが貼られた大きな要因だ。しかしそうした見解は考え直すべきだろう。その航行能力と速度、潜水能力を活かした対艦戦闘能力こそ、ゴッグが評価されるステージと言えるからだ。実際、ゴッグは人知れず海洋封鎖を行い、経済的打撃という、目に見えない戦果に表れない形で貢献していたのだ。

を行く地球連邦サイドの商船（輸送艦）の場合によつては随伴の軍艦も破壊し、海上封鎖を行うのだ。洋上（水中）を高速で航行し、敵船を発見して攻撃を仕掛ける。護衛の駆逐艦にとつても、高速度で航行するゴッグを捉え、機雷なり対潜ミサイルなりで迎撃するのはかなり困難が伴う。

水中を主戦場とするゴッグだが、沿岸施設を攻撃、占拠するような上陸作戦でも高い能力を発揮した。フリージャーヤードを用い、まずゴッグが先発隊として進む。敷設された機雷群を無効化しつつ、上陸したところでメガ粒子砲を使用して車両や建物などを広範囲に破壊。さらに重装甲を活かして自身

が橋頭堡となり、後続のアッガイなりズゴックなりの上陸を支援する、という戦術だ。

ただし、重量過多や冷却能力を考えれば、上陸後の機動戦闘は、様々な制約を受けただろう。こうした性能面のマイナス要素が、ゴッグに水陸両用機として劣った機体というレッテルが貼られた大きな要因だ。しかしそうした見解は考え直すべきだろう。その航行能力と速度、潜水能力を活かした対艦戦闘能力こそ、ゴッグが評価されるステージと言えるからだ。実際、ゴッグは人知れず海洋封鎖を行い、経済的打撃という、目に見えない戦果に表れない形で貢献していたのだ。

を行く地球連邦サイドの商船（輸送艦）の場合によつては随伴の軍艦も破壊し、海上封鎖を行うのだ。洋上（水中）を高速で航行し、敵船を発見して攻撃を仕掛ける。護衛の駆逐艦にとつても、高速度で航行するゴッグを捉え、機雷なり対潜ミサイルなりで迎撃するのはかなり困難が伴う。

◀設定画はP104へ

主な配備地域

北大西洋沿岸や北大西洋沿岸など、時期は短くとも主力機のため基本的には世界的に配備されている。だが、これもズゴックと同じくユーコン級潜水艦とともに通商破壊のため世界の世界で活躍していた。また、ジャブロー攻陥に備え、北米基地では常に一定数が配備されていたと思われる。



◀ジャブロー攻陥後にもゴッグなどと共に参加した戦いにもみえた



の機動性は大きく向上した。これにより、陸上での

う軽さである。これにより、陸上での機動性は大きく向上した。これにより、陸上での

統合整備計画とは、大戦末期にジオン公国軍によって実行されたモビルスーツ運用の合理化、効率化を図るためのプランである。

コンセプトの転換で高評価を得たが……

ジェットバック

瞬間的に推力を向上させるブースターで、水面付近で点火しその推進力を使って一気に敵との間合いを詰める（空中の飛行も可能）。

MSM-03C

ハイゴッグ

Spec

頭頂高：15.4m 本体重量：54.5t

全備重量：253.0t

ジェネレーター出力：2,735kW

スラスター総推力：86,000kg

(38,000kg×2、10,000kg×1)

装甲材質：チタン・セラミック複合材

武装：ビーム・キャノン×2 魚雷発射管×4

ハンド・ミサイル・ユニット×2

バイス・クロウ、他

……アーム

直立状態でも地面に届くほど長い。体勢を支えることができるため、湿地帯や凍結地など足場の悪い場所でも戦いやすい。

バイス・クロウ

消耗するツメの先端部分を交換可能で高効率。ズゴックEと異なり4本が並んでいる掌状に近い形状だ。

マシンキャノン

ハイゴッグの腹部に装備された実体弾による斜撃兵器。

武 装

ビーム・キャノンは基本的にズゴックEと共通のもので、連射性と威力に優れる。ハンド・ミサイル・ユニットはビーム・キャノンの発射口にマウントするため、装備中はビームによる射撃はできない。頭部には魚雷発射管を4基備える。また、武装ではないがズゴックE同様ジェットバックの装備も可能だ。



高射性だけでなく威力も高く、至近距離で撃つのはジムのボクティを裏通して有利なパワースタイルだ。



ハンド・ミサイル・ユニットは大型の装備で、オレングの部分はカバライ射撃で撃つ。

vs ジム寒冷地仕様

スペック的にはズゴックE同様、勝っている。加えてパイロット次第ではハイゴッグの体形を活かしたトリッキーな動きで相手を誤算でき、初見の相手には有利だ。ただし装甲はゴッグほど丈夫ではなく、集中砲火を受ければあっさり撃破されてしまう。



ジェネレーター出力は2735キロワットでズゴックEとほぼ同じで、どちらもメガ粒子砲を装備していることから見て、ジェネレーターは基本的に同じものを搭載していると思われる(統合整備計画の一環だろう)。

推力に関しては総推力こそ6万6000キロとゴッグより低い、背中にジェットバックと呼ばれる化学燃料ロケットを装備できるようになった。

しかし、このようにハイゴッグを仔細に見ていくと疑問点が浮かび上がる。スベックや能力的に、ハイゴッグはズゴックEとほぼ同等だ。特に運動性と引き換えにゴッグが持ち合わせていた重装甲による高い防御力という利点は捨て去っており、そのため連邦軍のジムが装備していたマシンガンで装甲をあっさり撃ち抜かれてしまったこともある。

つまり、ゴッグからハイゴッグへ再設計される過程で、コンセプトがまったく違うものに変わっているのだ。そしてそのコンセプトとは、スベックから考察するにズゴックE(つまりはズゴック)と同様、水中からの砲撃、揚陸用の水陸両用モビルスーツといえる。ズゴックEと大きく異なるのは直立姿勢で地面まで届く腕の長さだが、腰のようにしならせてクロウ攻撃時の威力を増加させ、格闘能力を強化している。

体形

全高は15mクラスと当時のモビルスーツとしては小型。足も短いため重心心で安定性がよく、長い腕と合わせて他のモビルスーツには真似のできないアクロバティックな行動が取れる。

ビーム・キャノン

ズゴックEと共通のジェネレーターにより、高収束率メガ粒子砲(ビーム・キャノン)の使用が可能となった。

という可能性もあるものの、本質的な相違点とまでは言えないだろう。

なぜ、このように似た機体を2種類も生産しようとしたのか。考えられる可能性としては早急に数を揃えたかったということだが、それならハイゴッグを製造するのではなくズゴックEをライセンス生産するだけで事足りる。しかしそれをせず、別の機体を作ってしまったあたりは統合整備計画の不徹底さを表しているといえるだろう。

あるいはもしかしたら、ハイゴッグ開発の初期段階では本来のゴッグのコンセプトである高い航行・潜水能力と重装甲を引き継いだ本来のハイゴッグを開発する案があり、それを転用することで本機の誕生につながったのかもしれない。

いずれにしろ、徒にモビルスーツの開発を濫発するというジオン公国軍のモビルスーツ開発事情は、統合整備計画という合理化のあとでも変わらなかつたということだろう。このハイゴッグからともすれば見て取ることができる。

◀ 設定画はP118へ

主な配備地域

ズゴックEと機能的には等しいので、世界各地のジオン公国軍沿岸拠点到配備されている。さらにコーン級潜水艦に搭載された状態で各地の海を航海中だ。足場の悪さに強いためアッガイとともに湿地帯やジャングルに配備された可能性もあるが、あまり高濃度のところはジェネレーターの能力が制限される難点もある。



◀ コーコンに格納され、世界の海を自由に航行。しかし大規模な勢力拡大にはまだ手が届かない。



◀ 連邦軍の北極基地襲撃の際、小隊を率いて行進中。機体の性能を活かして、雪原を自由に移動する。



ズゴック系

ガンダムをものぐすポテンシャルを秘めた高性能機

陸上用モビルスーツに迫る陸戦性能に、ビーム兵器を標準装備。MIP社が初めて手掛けたモビルスーツは、最初から名機と呼ぶにふさわしい性能だった。



圧倒的性能には 歴史を変える可能性もあった

水陸両用モビルスーツの中でも最後発となるズゴック系は、MIP社のフロジェクトとして開発が進められた。もともとモビルアーマー開発に実績があり、モビルスーツの開発は行ったことのない同社だが、ジオニックス社からの実験データの供与もあったと考えられ、完成度の高いモビルスーツを送り出すことに成功する。

水空/冷方式のハイブリッドジェネレーターは高出力を示し、同社が得意とするビーム兵器の搭載を、一般機に先駆けて成功。純粋な出力としての側面でも、陸戦機よりも大幅に重量が増しているが、パワーウェイトレシオではグフやトムすらも回った。

完成度の高さを誇る半面、その開発は大幅に遅れ、実戦投入はゴッグよりもかなり後のことだったという。突出した性能を実現するために開発が難航した可能性もあるが、その一方で対モビルスーツ戦を意識したことで、方向性の転換が行われた可能性もある。

たとえばゴッグのクロウ部分は、広範囲の面にダメージを与えるII対潜や拠点攻撃を意識したものだが、ズゴックのアイアン・ネイルは点の攻撃IIよりピンポイントな攻撃対象であるモビルスーツを意識していると考えられ、突き刺す以外にも、はさむ、ひっかくなど、アクションの多様性も増している。こうした「格闘用アーム」という考え方に關しては、モビルアーマーで実績を持つMIP社ならではのノウハウが

生かされているのだと思う。

その後発売された統合整備計画においては、ズゴックEへと発展。パーツの共用化、操縦系統の統合化といった同計画の基本コンセプトのほか、水流抵抗軽減を目的とした各部装甲形状の見直し、腕部のアイアン・ネイルへの変更などが行われている。

E型が純粋なズゴックの後継機である一方、その性能を陸戦型へと向けた機体がズゴックである。ともすればどの陸戦モビルスーツよりも優秀なズゴックの性能を、陸戦用として再設計したとしても不自然ではない。

こうした試みはズゴック以外に、ガッシャのような次世代機の開発にも見られる。本機は水陸両用機以外に、ジオン主力機に革命をもたらす可能性を秘めていたのかもしれない。



⇒ コクビット



機体中央部に備えられる
がディ中央の六角形のパーツ
がコクビットハッチ。搭乗時
には、レールが設けられ、エ
レベーターのようにハッチご
と昇降する。機体サイズが大
きいことから内部は広い。

⇒ 武装

腕部に武装を集約

対潜用武器は頭部に備える一
方、腕部にアイアン・ネイル
とメガ靴子砲を装備した武装
ユニットとなる。スゴックE
では、よりミニチュレータ
ー的なバイス・クロウへ発展。



⇒ ジェネレーター
ハイブリッド
ジェネレーターを搭載

水冷・空冷併用のジェネレータ
ーを採用し、陸戦性能が向上。
冷却水の搭載量を減少したこと
で、機体の装備重量も軽減し、
運動性の向上につながっている。



⇒ 頭部

武装コンテナを
兼ね備えた頭部

頭部がボディと一体化さ
れ、全周面モノアイレー
ルを備える。頭部には6
連装のロケットランチャ
ーを装備。スゴックEでも
この構造は受け継がれる。



⇒ ランドセル
水中地上両対応の
推進ユニット

ランドセルは、熱核ジェット・
熱核ロケットエンジン。水中で
の推進力だけではなく、陸上
での運動性にも貢献。スゴック
Eでは、ユニット式のジェット
パックも装備可能となった。

⇒ 脚部

柔軟な構造で陸戦に対応

腿部をフレキシブル構造とす
ることで、脚部の自由度は高い。
こうした構造的な要素もあり、
ゴッグやアッガイよりも、陸
戦への適応性は高かった。



スゴック系の進化

U.C.0079
MSM-07D1
ゼーゴック

モビルダイバーシ
システムの機動管制
ユニット。



U.C.0079
MSM-08
ソゴック

アッガイシリーズと
の連携を意識し、
陸戦性能を重視。



U.C.0079
MSM-07E
スゴックE

統合整備計画に
則った改良を施
され、熟成がは
かられた。



U.C.0079
MSM-07
スゴック

MIP社初のモ
ビルスーツ。
最後発であり、
高い性能を示
した。





vs連邦製モビルスーツ

S型の先行量産型は、一瞬の隙を突いてジムの腹部をクローで貫くほどの動きを見せた。また、ガンキャノンと組み合ったときはパワ一的に優位にあった。熱的に余裕があり機関を全力で稼働できる間は、陸上での戦闘能力も高い。



**傑作機になった訳は
水中と陸上の能力バランス**

MSM・07スゴックは、後発のMSM・04アッガイよりも開発が遅れ後の7番目の機体として完成した水陸両用モビルスーツである。モビルアーマーなどの機動兵器の開発を得意とするMP社が担当した。

実際のところ、スゴックは、ゴックと競合する形で同時期に開発が始まった。型式番号の数字が離れているのは、開発遅延によるためで、一説にはゴックの試験データを元に設計変更を行ったとも言われるが、大幅にというわけではないだろう。

その理由は双方のスペックの差を見

れば明らかで、実に差が大きいからだ。スゴックとゴックでは重量は本体重量で20トン弱、装備重量で60トン強もスゴックが軽い。陸上での両機の機動力には大きな差が出ている。反面、スラスタの推力はゴックの約70パーセント。この数値はスゴックがゴックに劣る数少ない部分である。

ジェネレーター出力に関しては、スゴックの方が約40パーセント高出力である。スゴックもゴック同様メガ粒子砲を装備しているが、収束率はゴックより高く、装備場所も腕部に内蔵されているため、その自由度は高い。

そしてこのジェネレーターは、ゴックと異なり水冷/空冷ハイブリッド式と呼ばれる冷却方式を採用していた。

水(冷媒)の搭載量を減らし機体を軽量化すること、さらに冷却も液冷に頼らず、空冷状態での稼働も前提に設計することで、陸上での行動速性や作戦行動時間もゴックより高いだろう。

ボディ形状の違いがあるため簡単に比較しきれないが、海中の航行能力特に速力に関してはゴックが勝るだろう。水深に対する耐圧能力も、一般的なモビルスーツ体形に近いスゴックより、全身を耐圧殻としたゴックの方が優れていると見られる。

つまり、スゴックは総合的に見てゴックより陸上での行動能力に重点を置いて開発されたモビルスーツといえる。そのため両機は競合機とはいえず、その開発コンセプト自体が違う機体と言えるのだ。いかに開発が遅れたとはいえ、ゴックの実働データを元にして、完全に再設計するほどの時間があつたとは到底考えにくい。スゴックは、軍からの要求性能のひとつである通商破壊に必要な航行・潜水能力をある程度満たしつつ、より強襲戦闘の能力に重きを置いていたのである。反対にゴックは洋上・海中における能力重視型の機体といっている。

水陸両用機としての主力の座は、結果的にゴックではなくスゴックのものとなった。実際の戦場で求められた状況に対し、スゴックの方が近かったから、という理由ではないだろうか。

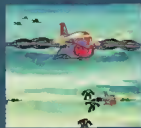
←設定画はP105へ

主な配備地域

ジオン公国軍の主力水陸両用モビルスーツとして、キャリフォルニアベースをはじめとして世界各地の沿岸基地に配備されていた。実際にはユーコン級潜水艦などとともに、基地より遠く離れた海洋での行動を行っていたため、配備数は流動的に補給のため基地から基地といった状況だったとも考えられる。



●北アイルランドの都市、ヘルファストにある連邦軍基地を襲撃する際にもゴックが投入されている。



●ジャブロー基地攻略に参加。方々に空輸され、担部隊として参加した機もある。



Z'GOK EXPERIMENT

背部ジェットバック……

これを装備した姿形こそズゴックに似ているが、ズゴックと異なり地上(空中)用の装備である。

アポジモーター

姿勢制御用のアポジモーターを新しく装備し、陸戦時の機動性アップに貢献している(ハイゴッグも同様)。

■ MSM-07E

ズゴックE

Spec

頭頂高: 18.4m

本体重量: 69.5t

全備重量: 311.0t

ジェネレーター出力: 2,570kW

スラスター総推力: 112,000kg

(20,000kg×4、16,000kg×2)

装甲材質: チタン・セラミック複合材

武装: 魚雷発射管×6、ビーム・キャノン×2

アイアン・ネイル×2

四肢の関節構造

フレキシブル・ベロウズ・リムを使った手足の関節の構造は変わらないが、リムの数が増えより細かい動作が可能となった。

増加装甲

肩や太腿の付け根に装甲が追加され、激戦時の防御能力は向上

武 装

腕部に内蔵したメガ粒子砲(ビーム・キャノン)はエネルギーCAP技術の進歩により、連射能力が高まった。ズゴックからの変更点として頭部のミサイル発射基は魚雷に換装されているほか、アイアン・ネイル4本になるなど細かい仕様変更がされているが、全体的には機体同様、武装もキープコンセプトである。



■ アイアン・ネイルの本数はハイゴッグと同じく4本だが配置はハイゴッグと異なる。物陰むきも可能

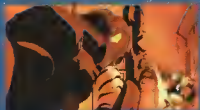


■ 海中での能力を求め、頭部ミサイルは魚雷に替わった。発射基の数は変わらない。



vsジム寒冷地仕様

ジェネレーター出力や武装など。スペック的には重量以外は勝っている。少数のハイゴックとの連成部隊で重要機密を抱える連邦軍基地を襲撃することすら可能だった。外気温が低くスゴックE（およびハイゴック）の出力が維持しやすい北極という特殊な環境であることを差し引いても、能力的には非常に高いことがわかる。



スゴックのコンセプトを引継ぎ熟成させたモデル

MSM・07スゴックは水陸両用機として有用な機体だったが、MSM・07EスゴックE（エクスペリメント）はそのスゴックのコンセプトを引き継ぎつつ、完成度を高めたモデルといえる。その際に統合整備計画をはさんでいるため、ハードウェア的には大きな変化を遂げている。

もっとも大きな部分は生産性に関する点だろう。スゴックはメガ粒子砲の内蔵や、空冷と水冷をハイブリッドさせたジェネレーターを持ち、複雑で手間のかかる構造を持っていた。

また、スゴックはモビルスーツの開発の経験が少なくMIP社が開発したためコクピットも一般的なモビルスー

ツとは規格が異なっており、せっかくの性能を発揮させるにはそれなりの訓練を必要とした。

統合整備計画は、こういったモビルスーツにおける諸問題を解決するために遂行された計画だ。その基本骨子は各々のパーツの規格やコクピットおよび操縦系統といった、モビルスーツの構成要素単位において、できるだけ共通性、統一性を持たせて生産・管理の合理化、ならびに効率化を図るというもの。スゴックEも計画の要綱に沿って再設計された機体である。

具体的には、コクピットのコンポーターが第二期生産型と呼ばれるタイプになっていること（これはハイゴックでも採用している）が大きなポイントだが、スゴックの特微的装備だった腕部のメガ粒子砲も、MS・14ゲルグ

の開発によって培われたエネルギーC/Aロ技術がフィードバックされており、威力と連射性が向上している。

クローも基部から一体型になっているタイプではなく、ハイゴックと同様に戦闘で損耗する先端部分だけを換えやすい構造になっている。

また、統合整備計画の内容と離れた変更点としては、水中用推進器が背中から股関節と脚の裏に移設され、かわりに背中にハイゴックと共用のジェットパックが装着できるようになった点が挙げられる。

さらに背中には陸上用（地上でジャンプなどに使う）のスラスタが4基内蔵され、姿勢制御用のバーニアも増設されており水中から陸上への強襲、揚陸用モビルスーツとしての機動力がアップされた形だ。

これらの変更点により、スゴックEはスゴックより生産性やコストにすぐれ、なおかつ陸上で活動するモビルスーツとしての性能も向上している。

スゴックEは、実質的にはスゴックに比べて大幅な改良をしたわけではなく、あくまで統合整備計画を導入するにあたって、使用実績を踏まえ適性化しただけの機体とも言えるだろう。

しかし言い換えれば、水陸両用モビルスーツとしてのスゴックが、最初から優秀な機体であったという証明でもあるのだ。

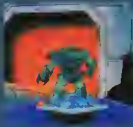
←設定画はP116へ

主な配備地域

スゴックの後継モデルだけに、一定以上の規模の沿岸基地には全世界的に配備されていた。だが、生産されたのが一年戦争最後期のため、ジオン公団の地球における勢力圏は狭まっており、実質的な配備地域や配備数は多くはない。沿岸警備の他、北極では海中からの奇襲など機体特性を活かした使用方法がなされている。



「ハイゴックとともに連邦軍の北極圏に奇襲を仕掛け、シールド砲撃も阻止しようとした」



「外気温が低く、冷戦能が高まる極地では上陸のスゴックEの能力も活しやすい」



■ MSM-07D1

ゼーゴック

Spec

全長：27.3m 本体重量：212.0t
 全備重量：540.0～917.0t（装備により異なる）
 ジェネレーター出力：11,813kw
 スラスター総推力：285,000kg
 装甲材質：チタン・セラミック複合材 武装：腕部メガ粒子砲、
 大型ミサイル、ロケットランチャー、拡散ビーム砲ほか

ズゴックを兵装コンテナの 制御ユニットとして使用

ジャブローは、地球連邦軍の本部基地であるばかりでなく、一大生産拠点でもあった。ジャブローで製造された艦艇はそのまま宇宙に向けて打ち上げられ、新たな戦力となった。ジオン公国軍としては、これら連邦軍宇宙艦隊の増強をどう阻止するかというのは重要な問題であった。

モビルダイバーシステムは、これら地球連邦軍宇宙艦艇を打ち上げられる寸前、あるいはその最中に破壊するべく開発された試作兵器であり、計9機が製造されたという。

そのコンセプトは、打ち上げ態勢にある敵に向かって衛星軌道から急降下

右腕部

右腕は大型センサーユニットに交換されている。そのため実質的にズゴックの兵装として機能が残っているものは左腕メガ粒子砲のみ。



胴体

ズゴックの上半身と推進器（下半身）を接合した制御ユニットがゼーゴックであり、LWCを含めた機体全体はモビルダイバーシステムと呼ばれた。

武装

テストで使用された兵装は大型ミサイルを4基、28連装ロケット砲発射機4基、モビルアーマー用を転用したメガ粒子砲の3パターンで、LWCには基本的にどれか一つを搭載する。このうち実際に戦果を挙げたのはメガ粒子砲であったが、このような装備の駆動が可能であったのもズゴックであればこそであった。



▶大型ミサイル、ロケット砲とらにテストでは命中させることはできなかった。



▶モビルアーマー用メガ粒子砲は威力だが急造品のため5秒以上の発射は危険。

vs連邦軍艦艇

衛星軌道から降下し、打ち上げ中の艦艇と交差する形で攻撃を加えるという、非常に難度の高い方法で攻撃せねばならず、加えてジャブローの厳しい対空砲火にもさらされるため実際の戦闘は困難を極めパイロットへの負荷も大きい。しかしメガ粒子砲を使った試験時にはサラミス4隻、マゼラン1隻を一挙に撃沈している。



し、奇襲を行った後にガウ攻撃空母など味方航空機で機体を回収するという、他に類を見ないものであった。

モビルダイバーシステムの構成はLWCと呼ばれる大型の兵器コンテナと、コンテナに搭載した兵器を運用する制御ユニットに分けられ、LWCは戦闘終了後バーン、パイロットの乗る制御ユニットだけが回収されるというスタイルが採用された。

このLWCの制御ユニットには、水陸両用機であるズゴックの上半身が改装されて使用されており、ゼーゴックとちがって使用されている。

モビルダイバーシステムは水中に潜航するわけではないので、制御ユニットが水陸両用機である必要はない。にもかかわらずズゴックが選ばれたのは、LWCの動作に必要な高出力のジェネレーターを持っていたためである。

さらに、宇宙空間から大気内へと環境の急激な変化に対してもその出力を維持する必要があり、この点においても空冷と水冷を併用するハイブリッド式冷却機構をもつズゴックは適していた。また、ズゴックは機体がチタン、セラミック複合材でできており、超硬スチール合金を使用した他のモビルスーツより摩擦熱への耐性が優れていた点も理由として挙げられる。

頭部

頭部ミサイル発射口の跡はあるが、機能としてはオミットされている。

LWC

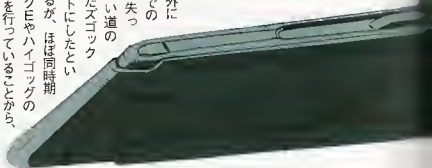
LWCとはLogistics Weapon Containerの略文字をとったものの、ロケット弾やメガ粒子砲など様々な武装を選択し運用することができる。作戦終了後は切り離され（破壊され）回収後はゼーゴックも「使い捨て」になる

それ以外に、地球での勢力圏を失ったため使いだのなくなったズゴックをユニットにしたという説もあるが、ほぼ同時期にズゴックEやハイゴックの開発・配備を行っていることから、水陸両用機そのものの必要性がないと判断された説ではないと思われる。

モビルダイバーシステムは都合4回の試験が行われたものの、テストパイロットが失われたことや、主戦場が完全に宇宙へ移行したことから開発が中止された。また、絶対条件等とも言える制空権の確保が困難になったことも、おそらく理由の一つであろう。

モビルダイバーシステムとは、実際制御ユニットの「器」の重要性はそれほど高くはない。それでも、水中と陸上という過酷な環境に適応させた水陸両用機の特長を、存分に発揮した事は間違いないであろう。

それ以外に、地球での勢力圏を失ったため使いだのなくなったズゴックをユニットにしたという説もあるが、ほぼ同時期にズゴックEやハイゴックの開発・配備を行っていることから、水陸両用機そのものの必要性がないと判断された説ではないと思われる。



← 設定画はP122へ

主な配備地域

ゼーゴックは試験機であり、正式に採用されることはなかったが、ジャブロー基地上空にて4度の試験を行った。もし採用が決まっていれば月のグラナダの艦隊や、地球に近く近い宙域を巡回する艦隊に配備され、「連邦軍艦艇打ち上げ」の報が入り次第衛星軌道に赴き、降下・破壊任務にあたったと思われる。



※運用方法上、場所も攻撃のタイミングも敵に読まれやすく、反撃も厳しい。



ジオン公国軍第600部隊、試験隊の艦ヨット・ヘイム。この艦は行方不明。

ZOGOK

■ MSM-08

ゾゴック

Spec

頭頂高：18.2m 本体重量：77.4t

全備重量：107.3t

ジェネレーター出力：1,688kW

スラスター総推力：97,400kg

装甲材質：チタン・セラミック複合材

武装：頭部ブーメラン・ミサイル×10

腕部ワイドカッター

アーム・パンチ×2

ボディ形状……

頭こそないが、フレキシブルペロウス・カムは手首部分以外使っておらず、普通のモビルスーツに近い。

ブーメラン・ミサイル

モノアイ……

カメラ自体は大型で、可動範囲もズゴックのように真後ろまで見渡せる構造にはなっていない。

ワイドカッター

ジェネレーター

メガ粒子砲は持たないが、ザクやグフなどに比べかなりの大出力。アーム・パンチを動作させるのに大電力が必要なのかもしれない。

マニピュレーター

手前から先が伸縮可能になっており、爆發的な勢いで伸ばすことでアーム・パンチとして作用させる。細かい作業には不向き。

スラスター

地上でのジャンプなどに適したスラスターを装備。推力の数値はズゴックより大きい。

武装

左右のアーム・パンチがゾゴックの「主兵器」。クローに比べメンテナンス（パーツ交換）の頻度やコスト、作業性に利点もある。頭部のブーメラン・ミサイルやワイドカッターはかなり特殊な形状だが、ウェポンベイに格納されておらず爆弾、誘爆の危険もある。戦闘開始とともに早々に使い切る武装と考えられる。



●ズゴックのアイアン・ネイルの貫通能力は高いが、ランニングコストも高い。



●ズゴックのミサイル・キャノン、直立状態での装填、陸上には不利。



水中航行も可能な 陸上用モビルスーツ!?

MSM・08ゾゴックは、MSM・07ズゴックをベースに開発された試作水陸両用モビルスーツである。といっても、従来の水陸両用モビルスーツとはまったく違うコンセプトで制作された機体となっている。それは、地球連邦軍のジャブロー基地を攻略することを主眼とした「揚陸後の格闘戦に特化したズゴック」である。つまり、具体的な使用法が明確に決められたものではないと言っている。

ゾゴックはズゴックをベースとしている機体ではあるが、水陸両用機の最大の特徴であるメガ粒子砲は装備しておらず、戦闘スタイルは打撃による格闘戦が、ブーメラン・ミサイルやワイ

ドカッターを使用した白兵戦だ。

ジェネレーター出力は1688キロワットとズゴックの7割程度だが、これでも一年戦争時のモビルスーツとしては高水準である。むしろパワー的に余裕が生まれ、陸上での「全力運転」での行動時間の延長などのメリットもあるだろう。しかし、重量は逆に増加しているため、機動性という意味では疑問が残る。機体もズゴックをベースとはいうものの、腰回りを除いて大幅に変更が加えられている。腕や脚はフレキシブル・ペロウズ・リムを使用していないが、これも陸上を重視した結果、一般的な「陸上用」モビルスーツに近い形となったためだろう。

武装は前述のとおり、主兵装はアー・ム・パンチである。マニビュレーターを装備しており、水陸両用機に特徴的なクローは持たない。クローは確かに強力だが、硬度や強度を考えると高価なはずであるし、交換サイクルなど不都合も多く、陸戦だけを考えるなら「拳闘」の方が合理的な面もあるだろう。

なお、マニビュ

レーターといっても戦闘用マニビュレーターであり、指は動くものの細かい動作は不得手であるが、ひょっとしたらマシンガンやバスター力程度は持つことは想定していたかもしれない。ブーメラン・ミサイルやワイドカッターなどの武装も、その威力、有効射程とも特記するほどのこともない。

実際、グフが後にB3タイプで距離に対応したという例も見るまでもなく、モビルスーツの戦いは、稀に格闘戦はあるが、基本はアウトレンジからの攻撃で決着がつくことが多い。そういった意味ではゾゴックは、中途半端な機体と言っている。ひょっとしたらジャブローが洞窟を利用していることから、必要以上に近接戦が多いと想定されていたのかもしれない。

ゾゴックは、アッグやジュアッグと部隊を組んで運用することを想定されていた。ジュアッグの320ミリロケットランチャーによる砲撃支援を受けながら敵に肉薄し、アー・ム・パンチで殲滅していくというのが、アッグシリーズナゾゴックの基本的な戦術となる（アッグには実質的な戦闘力は無い）。アッグガイとは近接格闘用の機体という点で競合するが、重量などのスペックや武装、ベースとなった機体を考えると、より機動力や直接的な格闘戦を重視した機体がゾゴックと考えることができる。

vsズゴック

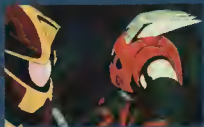
試作機ということもあり、ゾゴックは戦闘を行った記録に乏しほどの程度の実力だったかは不明な点も多い。ベース機であるズゴックと比べた際には、格闘能力は互角以上、稼働時間ではゾゴックが優れる。しかし遠距離攻撃用の兵装がないため、ジュアッグなどを伴わないで単機で戦闘を行うのは非常に危険である。数少ない実戦では宇宙世紀0088年にスタンバ所有の機体がズガンダムと戦闘を行ったことがあるが、空中からの縦り一発（大型のカメラ部分にヒットしてしまった）で行動不能となった。ゾゴックがオリジナルではない上に、機体の年代差がありすぎ、サンプルとしての適正に欠けるケースではある。

主な配備地域

ジャブロー攻略を目的に計画された機体であるため、当然ジャブロー攻略作戦に投入が前提だろう。しかし、洞窟内の戦闘にどう対応できるのかは未知数である。



★ジャブロー攻略用モビルスーツであったが、基地内を歩かせることはなかった。



★入手経路は不明だがスタンバ・ハロイのコレクションの二つになった。



アツガイ系

水陸両用モビルスーツの基礎を築く

ジオニックス社によってスタートした水陸両用モビルスーツ開発。だが同社はアツガイの生産のみにとどまった。はたしてその理由とは？



得られた基礎データを3社で共用 発展させていく

ザクをはじめジオニックス社はあらゆる状況において、モビルスーツ開発をリードしてきた。地球進攻作戦に際しても、その前哨を環境に対応するため、様々な局地専用機種のトライアルを奏演。その中で、地球上の大部分を占める海への対応も迫られることになる。

他の局地戦対応機と同様、やはりベースとされたのはザクであった。当初からの程度ザクの水中対応に期待がかけていたかは不明だが、開発の途中で早くもザク・マリントップの熟成は見送られ、データ収集用としての側面が強くなる。そしてツィマツト、MIP、ジオニックスの3社による異なるコンセプトの水陸両用モビルスーツ

開発にシフトした。

その後の歴史を振り返れば、ジオニックス社は多数のプロジェクト（根幹技術の開発や次期主力機ゲルググの開発）を抱えており、開発に要するカロリーの分散を危惧していたのかもしれない。ジオニックス社以外の面々が、ハイバフオーマンズのズゴック、ゴツグを開発したのに対し、ジオニックス社が水陸両用機ではアツガイ系の開発のみに終わらした点も、そうした状況が影響していたと考えられる。

3社同時開発は決して競合ではなく、明確な役割分担が持たされていたことは、各機の特長からも理解できる。ジオニックス社が担当したアツガイは、高い性能よりも「信頼性のある技術」を使用することで、実用性、信頼性、生産性を兼ね備えた機体を作ることにある。

「たはすた。アツガイは名より実を重んじた機体だつた」ある

すでに生産さるるザクの機体、を流用したツィマツト、MIP、アツガイの機体、を分散させることで、多量に生産した武装……。こうした方針により、用した設計は機体の改良を容易にし、ジュアングやアツガイといったアツガイシリーズなどの、特務機の開発も比較的短時間で入ると考えられる。

ハイバフオーマンズ機の開発に人的コストは避けないが、生産力ではジオニックス社は最大手である。そこがアツガイ系の位置づけだった。水陸両用モビルスーツの開発は決して各社が独自に進めたのではなく、ジオンという団が一体となり、それぞれの特性をよく理解したうえで進められたプロジェクトといえるのだ。

クローズアップポイント

⇒ コクヒット



複座式を採用する

コクヒットは複座式といわれる。特に役割を分担しているのではなく、単純にスペースを活用したと考えられる。ズゴッグ同様、レールで昇降することが可能である。

⇒ 武装

各種兵器を両腕に分散

左腕にアイアン・ネイルメカ粒子砲、右腕に6連装ミサイル・ランチャーという組み合わせが一般的。だが、両腕をランチャー（アイアン・ネイル）などに変更も可能。



⇒ ジェネレーター

ザクのものを流用したツインジェネレーター

ザクのジェネレーターを2基搭載し、高出力化を狙う。さらに水冷化することで、ジェネレーター冷却に対応。排熱が抑えられたことで隠密性が向上したと思われる。



⇒ 頭部

巨大な頭部はバラストタンク？

上方と全周面をカバーするモノアイレールは、首の可動範囲を補い、水中戦に対応した措置。巨大な頭部は水冷用バラストタンクの可能性も。武装として4連バルカンを備える。



⇒ 腕部

アタッチメント式で変更可能

両腕はアタッチメント式の武装ユニットと考えられている。アッグガイやジュアッグでも腕部の換装が可能であり、アッグガイの構造が引き継がれている。

⇒ 脚部

系列機はフレキシブル構造に発展

オーソドックスな関節構造を採用するが、関節部にはシーリングが施される。陸戦を重視した系列のアッグシリーズは、フレキシブル構造を採用している。



ザク〜アッグ系に進化



U.C.0079

MSM-04N

アッグガイ

ジャブロー攻撃用のアッグガイの特務機。格闘型。



U.C.0079

MSM-04G

ジュアッグ

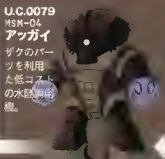
ジャブロー攻撃用のアッグガイの特務機。砲撃型。

U.C.0079

MSM-04

アッグガイ

ザクのパーツを利用した低コストの水陸両用機。

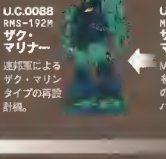


U.C.0088

RMS-192M

ザク・マリナー

連邦軍によるザク・マリナータイプの再設計機。



U.C.0079

MS-06M

ザク・マリンタイプ

MS-06FザクⅡを水中用にのちにマリン・ハイザクへ。



■ MSM-04

アッガイ

Spec

頭頂高：19.2m

本体重量：91.6t

全備重量：129.0t

ジェネレーター出力：1,870kW

スラスター総推力：109,600kg

装甲材質：超硬スチール合金

武装：頭部バルカン砲×4

左腕6連装ミサイルランチャー

右腕メガ粒子砲

アイアン・ネイル

頭部ユニットは
バラストタンク？

機体サイズに対して
巨大な頭部ユニット。
これは水冷・潜航用
の水タンクを搭載し
ているとも考えられ
る。モノアイレール
は上方や後方からカ
バーする。

……コクピットは横座式

訓練用や兵員輸送用などの説
がある。ザクのジェネレータ
ーを2基搭載したことから、
結果として機体サイズは大型
化したことで、コクピット内
に余剰スペースが生まれたの
だろう。

武装換装を
可能にした腕部

他の水陸両用機と同様、フレ
キシブル・ベロウズ・リムと
いう伸縮式多重関節構造を採
用。先端部は武装ユニット化
されており、換装が可能だっ
たと考えられる。

武 装

スコックと同様、両腕に武装が集中するアッガイ。だがズゴックがアイアン・ネイル+ビームを両腕に装備していたのとは異なり、右腕にアイアン・ネイル+射撃武器、左腕にミサイルランチャーと分散させ、さらに用途に合わせて換装を行ったと考えられる。すべての武装をフォローするよりも、コスト面で有利であった。



「両腕をロケットランチャーに換装した。後衛としての役割を担っていた？」



「伸縮式の関節と合わせ、クロイ攻撃。既存兵器を圧倒的な威力を」



スゴックと行動を共にする 同コンセプトの廉価版

ジオン公国軍の地球侵攻に際して開発が進められていたゴッグとスゴック。本来はこの2タイプでジオンの水陸両用機の構想は賅えたと考えられるが、突出した性能をもつ水陸両用機は、高コストを誘発し、大量生産には向ききとの回答が出された。

そのため、より現実的な生産モデルとして導き出されたのがアツガイである。一説にゴッグ、スゴックよりも後に開発された機体といわれるが、こうした要素は設計段階ですでにジオン側としては理解していたと考えられ、いわばハイローミックス思想のロー的な位置づけとして、平行してアツガイの開発が進められていたと考えられる。

vsガンダム

陸上での運動性能が高いとはいえず、相手がガンダムとなれば圧倒的に不利である。シャアはその不利を見抜いていたのか、戦闘を行わずに真っ先に撤退を告げている。だがその命令もむなしく、追撃するガンダムに蹂躞される結果となった。



後発の機体ながらMSM-04という若い型式番号がつけられているのも、そのためだろう。

ゴッグ、スゴック、アツガイは「水陸両用」という同カテゴリに属するものの、アツガイのコンセプトはよりスゴックに近いものとなった。ゴッグが通商破壊や上陸作戦の橋頭堡を作る役割を主としていたことに対し、アツガイは水中より地上での作戦行動が重視されており、機体構造(両腕に武装を持つ)、モノアイレールが360度をカバーする等、スゴックに近い。それゆえスゴック、アツガイでハイローミックスを構築しようとしていたとも考えられる。

ハイエンド機であるゴッグ、スゴックがツイマツ社、MIP社の開発に対し、アツガイはよりモビルスーツ開発に熟練し、生産能力や開発スピードが高いと考えられるジオニック社開発である点にも機体のコンセプトがよみとれる。すなわち、高性能で少数のゴッグ、スゴックに求められた要素とは相反する、すぐれた量産性を当初から求められていたのである。

たとえばジェネレー

ターには、ザクと同タイプのものを2基搭載するという画期的な設計が導きだされ、開発費を抑えようと、高出力化を実現している。このジェネレーターは、水中用対応として水冷化が行われたが、その変更によって熱排出量が抑えられるという恩恵も得た。その要素を隠密偵察用として活かすため、装甲や塗装にステルス性を高める措置が取られたというが、ジャブローでの潜入作戦に用いられたゆえに「隠密性が高い」という説が広がったとも考えられ、真偽は定かではない。

一方、武装面でもアツガイの徹底したコストダウン思想が見て取れる。右腕にはアイアン・ネイル+射撃武器、左腕には6連装ミサイルランチャーが搭載されるが、右腕にはビーム兵器を搭載するタイプもあった。つまり、アツガイの両腕部は武装ユニット化されており、局面に応じて腕部武装を換装できた可能性も考えられる。

こうした換装システムは、オールインワン型の機体を開発するよりも、はるかに低コストでの運用が可能である。こうした側面からも、現状を見据えているアツガイの優れた開発思想が見て取れる。

このように大量生産を目的としたアツガイだったが、ジオン公国軍が地球上から撤退を開始したことで、わずかに60機の生産のみにとどまったという。

◀ 設定画はP106へ

主な配備地域

水陸両用モビルスーツの中でも、生産数が比較的多いアツガイは、ジャブロー潜入作戦で用いられた機体以外に、東南アジア戦線でも確認されている。沿岸地域や湿地帯などの激戦区に、優先的に配備されていた可能性が考えられる。



◀ 東南アジアに配備された機体。細部が異なるマイナスイオン版底の可能性があります。



◀ ジャブロー潜入に用いられたモビルスーツ。試走は様々なタイプに換装されていた。



複眼式モノアイ

複眼式モノアイを採用。通常のモノアイよりも、センサー類が強化されているというが、性能は定かではない。なお、まったく異なる兵器だが、この複眼はザクレロにも採用されている。

AGGUY

MSM-04N

アッグガイ

Spec

頭頂高：19.0m 本体重量：113.7t

全備重量：171.6t

ジェネレーター出力：2,010kW

スラスター総推力：109,000kg

装甲材質：超硬スチール合金

武装：頭部バルカン砲×2

腕部ヒート・ロッド×4

陸戦に特化した脚部

脚部はアッグガイをベースとしつつも、変更が行われている。様はフレキシブル・ペロウス・リムのような構造となっており、陸戦性能を高めるために変更された可能性も。

4連のヒート・ロッド

アッグガイのメイン武器。グフよりも大幅にジェネレーター出力が高いこともあり、4連のヒート・ロッドを同時に使用することが可能だったのだろう。

武装

腕部を武装ユニット化したアッグガイの構造を受け継ぐ。そのため、基本武装である4連のヒート・ロッドのほか、アイアン・ネイルへの換装も可能であった。ジュアッグのバックアップがあるため、射撃武器は装備されていないが、アッグガイのロケットランチャーなどへ換装することも可能だっただろう。



↑ 機構を拘束後、ソコックに打ち付け、行動不能にさせるという運用も想定されていた可能性も。



↑ 本来はメテオとして打ち付け、行動不能にさせるという運用も想定されていた。



ジャブロー攻略用の 試作モビルスーツ

天然の空洞を利用した地球連邦軍の本部ジャブロー。この難攻不落の拠点を攻略する目的で開発されたアッグシリーズ計画の1機が、アッグガイである。このプロジェクトは、掘削用として侵攻ルートを確保するアッグ、後方援護用のジュアック、そして近接戦闘用として、ゾゴック、アッグガイという構成が想定されていた。

型式からわかるように、そのベースとなったのはMSM-04アッグガイであった。これはもともとアッグガイはザクのパーツを流用している面もあり、様々な設計変更等を受け入れる余地があったことが大きな要因だろう。また、特殊な目的ゆえに配備というのも重要な理由であったはずだ。

vsZガンダム

想定にあったジャブローでは使用されなかったが、タイガーバウムで展示品として保存されていた機体で実戦が行われた。だが相手は最新式のZガンダムであり、まったく通用しなかった。また巨大な複眼をバズーカで狙われるという状況も見られた。



他にも陸戦性能が高い点も、ジャブロー侵攻作戦に適していたとされる。そのため、水陸両用の機能はもたされてはいるものの、アッグガイは陸戦に特化した改裝がなされた。

水陸両用モビルスーツは、ザクやグフなどスタンダードなモビルスーツと比較すると、ジェネレーター出力やビーム兵器を使用できる点など、純粋に性能面で優れる。こうした特性を利用して陸戦型として開発する、という考え方が通されたとしても決して不思議ではない。ゾゴックもそうであったように、水陸両用から陸戦用への設計変更は、この時期のジオン軍で模索された案の一つだったのだろう。

アッグガイを特異なシルエットとしている要素として、頭部形状がある。ボティなどの根幹部はほぼアッグガイを流用するものの、頭部は上方や後方を

フォロイする全視界型ではなく、前部にセンサーを集中する複眼型を採用。これはアッグシリーズとの連携運用を基本としていたため、近接戦闘に主眼を置いたためであるといえるだろう。

一方、他の特徴としては腕部の4つのヒート・ロッドが挙げられる。これは陸戦用としてある程度の成果を残したグフからの転用であり、ザク2基分のジェネレーター出力を確保したことから、同時に複数の使用が可能となった。ここでビーム兵器が装備されなかったのは、補給のままだらない連邦本部において長期間の戦闘を強いられることや、陸上での作戦行動中の排熱の問題が発生することが予想されるため、使用に不安定な状況になりかねないビーム兵器よりも、グフで実績のあるヒート・ロッドのほうが信頼できる兵器と考えられたためだろう。

また、アッグガイシリーズは腕部を換装することが可能であったと考えられ、その設計はアッグガイにも継承されている。基本武装であるヒート・ロッド以外に、ゾゴックのパーツを転用したような3本爪のアイアン・ネイル装備型への換装が可能であった。

アッグシリーズはペーパープランで終わってと考えられていたが、一年戦争から8年後、タイガーバウムを統治していたスタンバ、ハロイのもとで2機のアッグガイが確認されている。

◆設定画はP112へ

主な配備地域

そもそもジャブロー攻略用の機体であり、ジャブロー以外での運用は想定されていなかった。そこで実績を挙げれば、水陸両用→陸戦用へ転換したモビルスーツのバイオニアとなった可能性もあるだろう。一方、タイガーバウムに保存されていたのはスタンバ・ハロイの趣味で、基本的には展示用である。



◆ジャブロー陥落時作戦が実施された時には、アッグガイシリーズは投入されてはいない。



◆本来は歴史の陰に埋もれていく機体であったが、タイガーバウムで復活。



■ MSM-04G

ジュアッグ

Spec

頭頂高：17.4m

本体重量：137.3t

全備重量：198.7t

ジェネレーター出力：2,660kW

スラスター総推力：97,900kg

武装：腕部3連装ロケット・
ランチャー×2320mm 3連装
ロケット・ランチャー

320mmという大口徑の
実体弾を3連装で備える。
1門あたりでもサ
ク・バズーカより大口
徑であり、その違方も
ない火力がうかがえる。

大幅に
変更された脚部……

脚部の大部分をフレキ
シブル・ペロウス・リ
ムで構成。アッグガイ
と同様、陸戦性能を高
めるために取り入れら
れたのかもしれない。

特異な形状の
頭部ユニット

チーム単位での行動に加え、
陸戦がメインのためか、モ
ノアイレールは前面のみに
変更。ノーズは陸戦メイン
のために増設された冷却ユ
ニットの可能性も。

武 装

武装は支援目的に特化しており、320mm 3
連装ロケットランチャーのみ。アッグガイにあ
った頭部バレルなども排除されている。一
方、アッグガイと同様、武装はユニット化さ
れており、他の武装は換装できる。アタッチ
メントが共通ならば、アッグガイのようにアイ
アン・ネイルも装備可能だったかもしれない。



↑ロケットランチャーを一斉発射。水陸両
用機でもトップクラスの火力。



↑ユニット式の腕をソ
クのマニピュレーター
としたモデル。

水陸両用モビルスーツの砲撃型

近いコンセプトを持つゾックとジュアッグ。ジャブロー攻略目的に機能が特化した部分もあると考えられ、もしジュアッグに運用の幅を持たせるのなら、他の武器の搭載や全周囲モノアイレールの採用といった措置が施されたかもしれない。



ゾックの廉価版として開発された!?

ジャブロー攻略を目的に開発されたアッグシリーズの1機。チーム単位で活動することを基本とし、アッグガイ、ゾックの砲撃支援目的のために開発された。

ベースとなったのはアッグガイであり、これもジュアッグと同様、機体数や設計変更を許容する構造から導きだされたと考えられる。

特務機といえるジャブロー攻略用の機体の例にもれず、ジュアッグも両腕に320ミリ3連装ロケットランチャーを備えるという、特異なシルエットを持つ。それゆえアッグガイよりも変更点は多岐にわたっており、特に砲撃戦型ということで装甲はゴッグなみの強度をもたされているという。アッグ

イ系のシルエットを残しつつも、細部にまで変更が加えられている。

なお腕部はユニット式となっており、ゾックのマネキュレーターを装備することも可能である。こうした部分でもアッグガイの系譜が見て取れる。

象の鼻のような特徴的なノーズ部は、特に機能について明かされていないものの、おそらく冷却ユニットではないのかと考えられる。他の機体と同様、ジュアッグも水陸両用機をベースとしながらもジャブロー内での活動を意識した陸戦メインの機体。高負荷にさらされるジェネレーター対策として、新たに冷却ユニットが追加されても不思議ではない。

そもそも計画のみに終わった機体であるため、解明されていない機能が多い。本体前面部にある、4つの開口部が何の機能をもたされているかは明らかに



はなっていない。様々な説があるが、転倒時に機体を起こすためのスラスト、もしくは水中用ハイドロジェットエンジンの噴出口という説が有力だ。

構造面からみるとジュアッグは特異な機体のように捉えられがちだが、実はアッグシリーズは、振り返ってみるとどの機体も理にかなったコンセプトのもとに作られている。ジュアッグもその例にもれず、「水陸両用モビルスーツの支援機」という位置づけはゾックが存在しており、ジオン軍にとっては決して珍しいコンセプトではなかった。

アッグシリーズという枠組みから外れた見方をすれば、ゾックとジュアッグは、いわばスゴックとアッグガイの関係性に近いといえる。機体全体的に高価となるメガ粒子砲を実績のある実体弾に置き換え、安価で信頼性の高い機体をベースとする……。同目的の廉価版をジオニック社が担当するという関係性はすでに確立されており、ゾックの廉価版としてジュアッグが開発されたと考えれば分かり易い。

ジオン軍の水陸両用モビルスーツ開発計画が予定通り進められていた、ゾックとジュアッグによる支援攻撃も実現したかもしれない。

◀ 設定画はP113へ

主な配備地域

他のアッグシリーズと向しく、ジャブローでの運用に特化させた機体であるため、他エリアでの運用は考慮されていなかったかもしれない。また実際にアッグシリーズでの攻略作戦は中止されており、戦場に投入されたかは定かではない。



◀ ジャブローに投入されれば、他機体のような活躍を見せた可能性も。



◀ ゾックのように、ジャブロー攻略を後方支援するチームも見られたのだろう。



Z A K U Marine Type

ハイドロジェット エンジンを搭載

水での運用のため
にランドセルはハ
イドロジェットエン
ジンへと換装。舵の
役割を果たすフィン
を備える。ここで蓄
積されたデータが、
その後の水陸両用機
に引き継がれていく
ことになる。

各関節の シーリング処理

各部の関節は防水用
にシーリング処理が
施され、可動部への
水の浸入を防ぐ。ま
た関節以外にも、あ
らゆるパーツで水の
浸入を防ぐ措置が取
られている。

補助推進 ユニットを増設

両腕の先端部と脚部
後方に補助推進ユニ
ットを装備。結果と
して四肢を動かすこ
とで、AMBACのよ
うな細かな方向転換
を行うことが可能と
なった。

■ MS-06M (MSM-01) ■

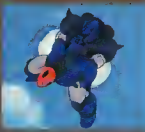
ザク・ マリンタイプ (マリン・ハイザック)

Spec

頭頂高：17.5m
本体重量：43.3t
全備重量：60.8t
ジェネレーター出力：951kW
ハイドロジェット総推力：66,000kg
センサー有効半径：3,200m
装甲材質：超硬スチール合金
武装：240mm 4連装ロケットポッド
サブロケット・ガン
60mmバルカン

武 装

ジェネレーター出力と水中での運用を考慮し、
武装は実弾兵器が中心であった。メイン武装
としてはM6-G240mmロケットを搭載したサ
ブロック・ガン、オプションとしてブラウニ
ーM 8タイプ240mm 4連装ロケット・ポ
ッドを両腕に搭載することも可能である。対潜
用としては十分な武装であった。



「基本的に同機体であるマ
リン・ハイザックにもが装
は引き継がれている。」



「対潜用の武装と噂され
るが、駆逐艦では主ビ
ノ戦にも用いられてい
る。」

海洋への対応のため 大改修を施される

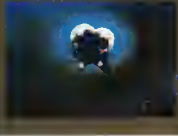
ジオン公国軍は地球侵攻に際し、同軍の切り札といえるモビルスーツを様々な環境に適した局地専用機へ改修することを行った。当然のことながら、地球上の7割を占める海洋への対応も考慮され、水中型であるM型が開発されることになる。

他のザクバリエーション同様、ベースとなったのはMS-06FザクⅡF型。変更点はハイドロジェットエンジンの搭載、脳部・脚部の補助推進ユニットの増設、後部に浮沈用のバラストタンクの搭載、水密コクピットへの変更などを中心に行われた。

当初、基本構造はF型を踏襲していたが、開発の途中段階から北大西洋潜水部隊への配備が想定され、水深40

vsガンダム Mk-II

一年戦争終結から7年後、ニューホンコンにおいて、マリン・ハイザックとガンダムMk-IIとの戦闘が確認されている。マリン・ハイザックは有利な海という状況に加え、4機がかりで攻撃を行ったが、最新鋭機との性能差は覆せず全滅している。



0メートルの深度での運用に耐える耐圧設計が要求された。また、宇宙用と水中用に求められる機密性の違いにも直面し、最終的には大部分がM型専用パーツとして新造されることになる。

初期に生産された5機はI型と呼ばれ、ハイドロジェットエンジンと水中用武装のテストのため、北大西洋の潜水艦隊シーサーベントに配備が行われ、実験が開始された。

M型の開発はそこで停止したわけではなく、各関節に防水用シーリングを施し、モノアイにも保護用の大型モニター・シールドを加えたII型がロールアウト。だが、それと前後して「ザク」の水中運用を行うプロジェクトは中止の憂き目にあい、水中用モビルスーツを開発するプロジェクトが優先されることになる。

その影響か、II型は2機のみが生産

にとどまり、I型と合わせてM型は合計7機が生産されるのみに終わった。そもそも「ザクの水中運用」というコンセプト自体、当初から現実的な戦力として考えられていたかは定かではない。むしろ水中実験やデータ収集といった面で比重が大きかった可能性もあり、その後の水陸両用モビルスーツの完成度の高さからも、M型の果たした役割がうかがえる。

M型の開発はジオニック社の主導で行われたが、シーサーベント隊の実戦で蓄積された各種実験データは、ツィマツ社、MIP社の面社に送られ、ゴッグ・ズゴックの開発に大きな役割を果たしている。本来はライバルとなるはずの開発各社の協力関係は、ジオンの置かれている特殊な状況をよく表しているだろう。

その後、7機のM型は特殊兵装のテストのため、レッドドルフィン隊の機、シーサーベント(2機)、グリーンサイレン(1機)、ナーガII(1機)、マントレイ(1機)へそれぞれ配備されることになった。すべての実験計画の完了とともに戦線から離れていったが、一年戦争末期に実験へと投入され、最終的には2〜3機の機体を残して撃破されたという。

戦後、地球連邦軍に接収され、リニア・シートを搭載したマリン・ハイザックへと近代化改修が行われ、増産された。

◀ 設定画はP111へ

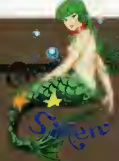
主な配備地域

北大西洋のサーベントに配備されたのち、各部隊へ分散。最終的には地中海侵攻上陸作戦へと投入されたという。戦後は連邦軍に接収され、改修されたのち、主に沿岸地域への警備に回されている。



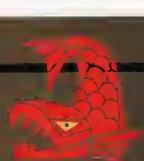
シーサーベント

▶北大西洋で活動する潜水艦部隊(主にゴッグ配備)。



グリーンサイレン

▶北大西洋で活動する潜水艦部隊(主にズゴッグ配備)。



ナーガII

▶太平洋で活動する潜水艦部隊。

水中用に改良された
モノアイレール

モノアイレールは上方や
斜方まで延長され、水中
用を意図した改良がここ
なされた。

■ RMS-192M ■

ザク・マリナー

Spec

頭頂高：17.5m

本体重量：48.8t

全備重量：68.3t

ジェネレーター出力：1,440kW

ハイドロジェット総推力：8,800kg

センサー有効半径：4,600m

装甲材質：チタン合金

一部ガンダリウムを採用

武装：サブロク・ガン、他

肩部サブロク

ザクタイプの機体の多くが、格闘用のショルダーアーマーを備えることに對し、ザク・マリナーではサブロク×3を搭載。いわばザク・マリナータイプの4連装ロケット・ボットを肩部に移設したイメージである。

着脱式ハイドロ ジェットエンジン

水中航行用のユニット。宇宙世紀0080年代らしい近代的な構成となる。ザク・マリナータイプと異なり、パイロットの任意で着脱が可能となっている。また武装のサブロクを搭載している。

サブ推進ユニットを増設

ザク・マリナータイプが後部にサブ推進ユニットを備えていたが、マリナーでは前面にも着脱式推進ユニットが増設されている。これはか前部のハーケンユニットも無脱式であるなど、本機のコンセプトが垣間見える。

武 装

武装は基本的にザク・マリナータイプと同系統で、水中戦を意識したロケット弾が中心となる。メイン武器はサブロク・ガン。さらに両肩と背面の推進ユニットに、サブロクを搭載する。腕にはマグネット・ハーケンを備えるが、これは武装というよりは機体を海中で固定する際や、曳航用として使用される。



■ 4連装のサブロク・ガン。基本的にはザク・マリナータイプと同構造である。



■ 両肩には単一機体のサブロクユニットを搭載するための使用をメーンとする。



ザク・マリナータイプから 発展した運用法

一年戦争後、地球連邦軍はジオン公国軍が残したMS・06ザク・マリナータイプを接収したことで、水陸両用モ



vsZZガンダム

ダカールを占拠したアクシズ勢は、アフリカ沿岸に駐留。接収されたザク・マリナーはさっそく水陸両用部隊に組み込まれた。だがアーガマのZZガンダムと遭遇すると、最新鋭機との差は水中でも埋めることはできず、全機撃破されてしまう。

ビルスツーツのノウハウをある程度獲得することに成功した。手始めに開発されたマリナー・ハイザックは、基本設計がマリナータイプに準ずるものであり、モビルスーツ開発の混乱期であるグリプス戦役らしい機体であるといえた。

ジオン公国軍ではあくまで水陸両用モビルスーツの試作機として使命を終えたM型であったが、戦後、連邦軍では引き続き開発を継続。ジャブロー工廠にてザク系水陸両用機の集大成、ザク・マリナーが誕生した。

後の記録に再設計機と記述されているように、そのシルエットはM型とは異なり、どちらかといえばベースとなったF型ザクに近い。構造部材にガンダリウム合金が記述されているのは、コクピットの剛性を高めるために採用されたという説がある。特徴的なのは、背部のハイドロジェットエンジン、脚部前面に増設されたサブ推進エンジン、着脱式としたことだ。また、腕部に曳航用のマグネット・ハーケンが装備されているが、こちらも着脱式となっている。これらのユニットを排除した姿は、MS・06ザクそのものであり、上陸戦にもすぐさま対応することが可能であった。

こうした背景には、そもそも運用エリアの設定がM型とザク・マリナーでは、異なっているからなのかもしれない。M型は最大活動深度400メートル、

目指した耐圧性能が持たされている。だがザク・マリナーでは、前述のパーツのユニット化をはじめ、関節のシーリング処理がされていないなど、浅い海域で活動するための仕様である。

これには、マリナー・ハイザックの運用実績が影響しているのかもしれない。グリプス戦役当時、地球上でもカラバなどの反政府組織が活動していたが、基本的には連邦軍内の抗争でもある。そうした組織が潜水艦戦力や、絶対的な機体数が少ない水陸両用モビルスーツを運用する必然性はない。ゆえに連邦側の注意は、航空部隊にふり分けられることになり、水陸両用機の配備エリアも、沿岸部が中心となったはずだ。

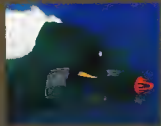
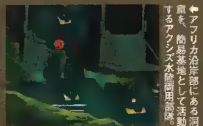
いわばザク・マリナーは、時代に適応した水陸両用モビルスーツであるだろう。M型をベースとした背景も、おそらくゴックやゴッグでは投資コストの割に過剰性能で、この時代の海の守りは、ザクで十分だったのだ。

皮肉なことに第1次ネオ・ジオン戦争でダカールを占拠したアクシズは、ザク・マリナーを接収。再びジオン側の戦力に組み込まれることになる。地上戦力が手薄なアクシズにおいて、数少ないカプラーをサポートする機体としてハイ・ローミックス的な編成が可能となった。旧ジオン系の設計を受け継ぐ本機は、同勢力のパイロットに歓迎をもって迎えられたという。

←設定画はP110へ

主な配備地域

マリナー・ハイザックから、沿岸地域への配備が基本になったと考えられるザク系水中用モビルスーツ。アクシズに接収された機体も、おそらく沿岸にあるダカールの買収用として配備されていたもの。ダカールを占拠した旧ジオン軍残党に組み込まれ、カプラーとともに運用された。



潜水艦部隊に配備されたマリナータイプと異なり、浅海の活動がメイン。

■ EMS-05

アッグ

Spec

頭頂高：15.6m 本体重量：69.4t

武装：大型ドリル×2
レーザートーチ
4連装ミサイル
ポッド×2～3

ベースは資源衛星
開発用の
作業用ホッドか？

ジャブロー攻略用の
試作モビルスーツとし
て開発された4機の中
で、ひととき貴重な存在
であるアッグ。他の3
機種がアッグイェズ
ゴックといった既存
のモデルをベースと
しているのに対し、ア
ッグのみはベースモデ
ルが不明である。水
陸両用としての機能はな
く、移動もホバークラフト
を用いて水上を移動する。

機体の構成も、歩行を無視し
たような脚部、汎用性を考慮して



堅い岩盤をくりぬく大型ドリル

両腕部に装備されたドリル。基本的にアッグは対岩盤作業用と考えられ、堅い土壌のみに対応した作業用機械である。腕部はユニット化されている。

武装

アッグの固定装備である大型掘削ドリル、肩部カッター、レーザートーチはあくまで作業用であるため、基本的に戦闘用の武器は一切装備していない。アッグ武装型では、ロケットランチャーを装備しているものの、これらも急増しのぞにすぎず、モビルスーツに对抗できた可能性は低いと考えられる。



ロケットランチャーを装備したアッグ武装型。腕部はユニットごと交換が可能。足腰にはホバークラフトユニットを備える。



ロケットランチャー
コックをばじめ、水陸
両用機として、な

作業用を転用したボール

作業用を転用する、という意味では地球連邦軍のボールも前例といえるかもしれない。もっともボールは戦闘用であるため、アッグとは状況が異なっている。だが他の目的の機械を有効に活用するという考え方は、宇宙世紀にも浸透していたのだろう。



作ることになったという。こうしたい振振能力は、実は宇宙でも必要とされていた。それは資源衛星の掘削作業だ。コロニー開発時代、多くの資源衛星がアステロイドから地球圏に運ばれてきた。モビルスーツの原型となる作業用機体は、すでにコロニー開発用として一般的存在であり、こ

うした資源衛星の開発にアッグの原型となった作業用機械が投入されていたとしても不思議ではない。

掘削用の…… 大型カッター

肩部のカッターは切削用。ボティの半分以上を占めるほどの巨大なカッターで、体全体を使って掘り進んでいったのではない。

も宇宙用を想像させる。地上移動用としてホバーを採用したのも、苦肉の策だったのではないだろうか。

アッグは基本的には作業用であるため、武装は装備されていない。胸部には大型掘削用ドリル、肩部の

業用ユニットに変更することを目的としていたのではないだろうか。いずれにせよ、アッグシ리즈を使用したジャパロ一攻略作戦は実施されることはなく、アッグ自体が生産されたかも定かではない。

だが、もしアッグのベースとなったのが資源衛星の掘削に実績のあるモビルスーツであったならば、その作戦は決して荒唐無稽なものではなかったはずだ。

り、アッグの源流は、こうした資源開拓するための作業用機械だったのではないだろうか。

カッターは掘削用であり、モノアイの下部に装備されるのも作業用のレーザ・トーチである。

士 頭頂部にミサイル・ランチャーを装備し、左舷のドリルもミサイル・ランチャーに変更したアッグ武裝型というブランチも存在したが、もともと作業用であるため、戦力としてはほとんど期待されていなかっただろう。おそろしく腕部の換装システムは、様々な作業用ユニットに変更することを目的としていたのではないだろうか。

いずれにせよ、アッグシリーズを用いたジャブロー攻略作戦は実施されることはなく、アッグ自体が生産されただかも定かではない。

だが、もしアツグのベースとなつたのが資源衛星の掘削に実績のあるモビルスーツであつたならば、その作戦は決して荒唐無稽なものではなかつたは

移動用の……
ホバーユニット

脚部は簡略化され、1脚につき3個のファンと、2基のパワーサプライが装備される。構造的に見ても、歩くことはできなかったと考えられる。

主な配備地域

他のアッグシリーズと同様、ジャブロー改組のために考案された機体であるため、運用されたのであればジャブロー以外には考えられない。だが実際には計画自体が中止となったため、開発自体が行われなかった可能性も高い。特にアッグは作業用であるため、実戦に投入される可能性も低い。



◀モビルスーツがぶら下がれるほどの岩盤。これがアツダの戦う相手だった。



「じゃ、口の入り口で、
こうした場所から侵攻ル
トを……」と、だるそうが、

前後対称構造

機体の前面と後面が同じという珍しい構造。出力的には前後同時に攻撃できるかは不明である。

■ MSM-10

ゾック

Spec

頭頂高：23.9m

本体重量：167.6t

全備重量：229.0t

ジェネレーター出力：3,849kW

スラスター総推力：253,000kg

装甲材質：チタン・セラミック複合材

武装：頭部メガ粒子砲、

肩部メガ粒子砲×8

アイアン・ネイル×2

センサー

金属反応を感知するなどセンサー類は高性能。相手に察知される前にアウトレンジから射撃する際にも役立つ。

マーカー

水中にマーカーを流し、味方機との合流ややり取りを行う。水陸両用機全機に装備されている。

アイアン・ネイル

「砲台」としての設計上、近接戦闘用というより、アンカーとしての装備。

脚部

上半身と比べアンバランスな小さい脚部だが、歩行ではなくホバーで移動する。

スラスター

ジャンプ力はザクの数倍あり、スラスターの推力自体は大きい。

武装

ゾックの武装は「移動メガ粒子砲台」のコンセプトであり、肩に片面4門×2の8門のメガ粒子砲と、頭部に1門のフォノン・メーザー砲のみ。砲の死角が少なく連射能力も高かったため、ミサイルやロケット弾などの副兵装の必要性は薄かった。クロウは格闘戦用ではないが、艦艇相手なら適用するだろう。



■頭部フォノン・メーザー砲は艦艇空機や対魚雷用に使われる。



←ゲイトを破壊するほどの威力だが、用途が適切でなく、実戦での結果は怪しい。



メガ粒子砲台と化す 手段としての水陸両用機

水陸両用機は、機関冷却に海水などを
使用することで、当時の通称主モビルス
ーツよりも高出力を発揮できるジェネレ
ーターを搭載していた。そして水陸両用
機がこの高出力ジェネレーターに恩恵を
もつと受けていたのは兵装であると言
っていいだろう。

一年戦争中盤当時、地球連邦軍よりも
エネルギーCAP技術の確立が遅れていた
ため、ビーム兵器をモビルスーツに搭
載できずにいたジオン公国のモビルス
ーツが、水陸両用機にメガ粒子砲の搭載
を可能にしたのは、このジェネレーター
出力の高さであつてこそである。

MSM-10ゾックは、水陸両用機の「ジ
エネレーター 出力面が有利」という面を

最大限に活かし、それを極限まで先鋭化
した機体だと言えるだろう。

ゾックに搭載された大型ジェネレータ
ーの出力は3849キロワットという、
当時のモビルスーツ用ジェネレーターと
しては破格のもの。これにより、肩部に
前後4門ずつ、合計8門ものメガ粒子砲
を装備することを可能とした。各砲、特
に肩部メガ粒子砲の威力自体もゾック
が装備していたものよりさらに増力で
連射能力すらあつた。

その反面、大型のジェネレーターと
メガ粒子砲用システムをボディに組み込
んだため、全高23メートル、本体重
量167・6トンという巨体を持つモビ
ルスーツになってしまった。スラスタ
ーは25万3000キロという数値なの
は、歩行による機動確保をほとんどあき
らめ、ホバー機能による移動を基本とし

たために他ならない。

ここから導きだされるゾックの必要性
とは、水陸両用機で構成される上陸部隊
にとつて必要となるであらう、圧倒的な
火力支援だ。つまり、ゾックはモビルス
ーツというよりは「移動砲台」として開
発されたのだ。ゆえに求められる火力が
最優先され、機体も大型化した。

また、実体弾兵器を搭載していい事
からも、他の水陸両用機のように、対艦
戦などの水中で作戦行動する事はほとん
ど考えられていなかっただろう。水陸両
用なのは、単に冷却の問題の解消、水
中を移動手段に使う作戦行動を想定して
いたといつて過言でない。

機体の前後が対称という極めて特殊な
構造も、姿勢や機体の向きにとらわれず
砲撃出来ることを考えての事だろう。つ
まり、それまでに機動性が劣悪になる
事が想定されていたという事で、実質的
な砲撃能力はメガ粒子砲4門というこ
となる。また、頭部のフロン・メーザ
ーは防空権のない揚陸での使用も考えた
対空装備であつた。

こう考えると、ゾックとは、目的を絞
つて開発された点は、実にジオンらしく
ないとも言えるが、わざわざモビルス
ーツという形態をとらないでもない兵器と
も言え、そういう意味では、何でもモ
ビルスーツにしないと気が済まないとい
う、実にジオンらしい兵器であると言
える。

vsRX-78ガンダム

RX-78ガンダムと交戦した際は、戦
闘で損傷を追ったシャアのズゴック
を逃がすため、一対一で向かい合う
形になってしまった。ゾックとしては「詰んだ」形であり、コクピット
を打ち抜かれて撃破されてしまっ
た。しかし探知していたボラスニブが、
やむを得なかったにせよゾックの特
性を考え、前に出過ぎたために撃
破されたとも言える。



◀設定画はP109へ

主な配備地域

ゾックはキャリフォルニアベースで開発され
た試作機であり、3機が製造された。そのうち
2号機はマッド・アングラー隊のシャアのもの
に送られ、ジャブロー攻略戦に参加して
いる。残りの2機は北大西洋の潜水艦隊マン
タレイに配備されたが、内1機は輸送中に連
邦軍の攻撃を受け損失してしまったという。



◀マッドアングラー隊では、
海中のシム・プロト基地へ
侵入を企てた。



◀艦隊司令部に知られ、ジャ
ー口基地へのブリックを搬送
するなどの活動を見せる。

GRUBRO

■ MAM-07

グラブロ

Spec

全長: 40.2m

本体重量: 324.1t

全備重量: 793.7t

ジェネレーター出力: 11,000kW

武装: アイアン・ネイル

7連装魚雷発射管×2、

ブーメラン・ミサイル×2

海中での能力に特化した 潜水艦的モビルアーマー

ジオン公国軍が水陸両用モビルスーツを開発し投入した目的は、大まかにふたつあった。ひとつは海洋を航行する船舶(商船)や艦船などを沈め、海域を封鎖する通商破壊作戦。そしてもうひとつがジャブローに代表される連邦軍沿岸基地などを海中から上陸・占拠する強攻作戦だ。

そのどちらの任もモビルスーツに背負わせたのは、ジオン公国軍がモビルスーツの可能性を信じていたことだけでなく、スペースコロニー国家であるジオン公国が海洋で使用する艦船の開発に不慣れであったため、よく知っているモビルスーツを転用した方が

ミサイル発射口

ブーメラン・ミサイルの発射口が2基、機体上部横に内蔵されている。

推進器

熱核水流ジェットエンジン6基備える。推力を活かし、スコックやゴッグを複数牽引することもあった。

アイアン・ネイル

航行時は後ろに格納し、水の抵抗を減らす。先端の硬度、強度、駆動トルクは高くガンダムを引っ張りきるほど。

魚雷発射機構

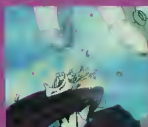
正面に片面7連装×2プロックの魚雷発射管が並び、弾頭も大きく、高威力。

武装

艦船を専門的に攻撃するグラブロの主兵器は計14門の魚雷。航空機にはブーメラン・ミサイル(整流板がブーメランのようなのでこう呼ばれる)で応戦するが、破壊力は大きく大型機の撃破も可能。また、弾種を換えれば対艦攻撃にも使えたと見られる。アイアン・ネイルのパワーは強大で、船底を突き破ることも容易。



ブーメラン・ミサイルはホワイトベースのデッキに大きな損傷を与えた。



アイアン・ネイルはガンダムの脚を簡単に壊す能力を持つ。

vsホワイトベース隊

ズゴックとともに海中から一方的にミサイルで攻撃し、ホワイトベースやGファイターに大きなダメージを与えた。しれて海中に飛び込んできたガンダムに対しても優位に戦闘を進めたが、一度獨んだガンダムの脚を破壊することで自由を与えてしまい、それを機に反撃、撃破される。結果的に能力が仇になってしまった。



よいという結論に達したということもあるだろう。
確かに沿岸基地に海中から強襲をかけ、上陸後に基地守備隊と応戦、制圧し占拠するといった作戦行動には、水陸両用モビルスーツは有用だ。
しかし、上陸作戦はともかく、通商破壊作戦だけを考えるなら、モビルスーツの形態にこだわる必要はない。むしろモビルスーツにこだわらなければ、より潜行・航行に適した形状にすることができ、大きさもモビルスーツのサイズに縛られる必要がないため、より強力なジェネレーターが搭載可能であったり、より多くの兵装を装備することができ、より多くの兵装を、弾薬も多数搭載可能というメリットもある。結果、作戦行動がより柔軟で、強力なものにすることができるとだ。

装甲

機体材質は超硬スチール合金だが、ガンダムのビーム・ライフルの照射を受けても水中では数秒耐えられる。

MAM・07グラブロは、まさにこのような観点からMIP社が開発した水中戦用のモビルアーマーだ。くちばしのような機体先端部やボディに2本のアームを供える構造などは同社のMAM・05ビグロ（ひいてはモビルアーマーの原形になった試作機動兵器MIP・X1）、とも似通っており、実際ベースはある程度共通であるという。推進器は熱核水流ジェットを6基備え、水陸両用モビルスーツを上回る水中での機

動性、航行能力を持っていた。

武装は機体前面に設けられた7連装×2の魚雷発射管と、機体上部にある垂直発射式ミサイル（形状からブーランミサイルと呼ばれた）を2基、そして3本のツメを持つアイアン・ネイルを装備している。

意外なことにグラブロはメガ粒子砲は備えていない。ブーラン・ミサイルはホワイトベースのモビルスーツデツキ下面を貫通、損傷を与えるなど攻撃力は十分に高く、また水中だけで行動するので、水中では威力の低下が著しいメガ粒子砲は必要ないとも言える。しかし、グラブロは試作機のまま、量産されることはなかった。その理由はおそらく、航行能力重視のゴックがズゴックに取って代わられたのと同じく、「ズゴックで用が足りる」からだだったのだろ。

グラブロは性能は高かったものの、戦争というリアルな視点で考えた場合、「豪華すぎる」兵器だったのかもしれない。



クチバシ

MIP社のモビルアーマーらしい意匠が現れている部分。メガ粒子砲は内蔵されていない。

◆設定画はP108へ

主な配備地域

グラブロは北米東岸サンディエゴ基地で試作機3機が開発されたのち、メキシコ湾で試験が行われた。試験後は1機が大西洋上にあったマッド・アングラール機に配備され、ホワイトベース隊と交戦し撃破された。残りの2機は一年戦争終戦まで活動を続け、終戦時はマダガスカル沖で2機とも連邦軍に拿捕されている。



マッド・アングラール機ではホワイトベース隊の中心力として活躍。



「一年戦争」中、サンディエゴ基地に配備された。グロの機体がわかる。

Spec

コクピット

コクピットのハッチは頭頂部にある。そのため機体を海中に潜わせただけでも出入りができる。

頭頂高：16.5m 本体重量：38.7t 全機重量：57.5t ジェネレーター出力：3,680kW
スラスタ総推力：6,800kg センサー有効半径：12,300m（大気中）／7,600m（水中）
装甲材質：ガンダリウム合金（二重装甲）
武装：アイアン・ネイル×2、レーザー・ビーム、ソニックプラスト、ミサイル×8

●ボディ形状

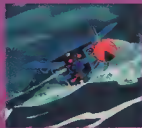
ほぼ球体のボディに非常に長い腕という、特異なシルエットを持つ。ハイコグに通じる形状。

●胸部ウェポンベイ

胸部はスライド開閉が可能で、内部に8連ミサイル発射基を備える。

■ 武 装 ■

武装はレーザー・ビーム、胸部ウェポンベイに収納されたミサイルとソニックプラストが主だった装備だが、ビームよりもミサイルが多用された。クローはガンダリウム合金製で旧来機より材質は優れるが、この時代はモビルスーツの装甲全般がガンダリウム合金に移行しており、特別なアドバンテージはない。



●伝統の胸部レーザービームは内蔵されておらず、ミサイル・アイアン・ネイルが主だった。



●ミサイルは海中、海上からでも使用できる。大気中にも使用可能。



vsアーガマ&ΖΖガンダム

海中ではΖΖガンダムと戦ったが、水中での行動を基本的に考慮していないΖΖガンダムには全く歯が立たなかった（パイロットの差も大きいと思われる）。停泊中のアーガマに攻撃を仕掛けたときは、海上を疾走するように移動しトリッキーな動きでミサイルを発射するなど、水陸両用機らしい活躍を見せている。



「非正規軍でも運用可能な「親切設計」の水陸両用機

AMX・109カプールは、宇宙世紀0080年代後半に開発された水陸両用モビルスーツである。開発したのはアクシズ（後のネオ・ジオン）。勢力としてのアクシズの成り立ちは、小惑星アクシズに難を逃れたジオン公国の残党勢力であり、そういった背景を考えると、ズゴックやゴッグなど水陸両用機の開発に携わったエンジニアが、カプール開発に関与した可能性は高い。武装の構成的にも一年戦争時代の水陸両用モビルスーツを意識していることが分かる。純粋な発展型ととらえていいだろう。

しかし、スペック的にはカプールはズゴックなど旧来機から比べ、大きく向上している。それは特に重量に関し

て顕著で、本体重量は40トン弱、全備重量でも60トン弱とジオン公国軍の水陸両用機に比べて非常に軽い。これは機体サイズもさることながら、アクシズ（ネオ・ジオン）製モビルスーツの多くが採用していたガンダリウム合金の使用によることも大きい。

ジェネレーター出力は水陸両用機の伝統どおり、同時期の一般的なモビルスーツに比べて高め。また、その航行性能は水中、水上共に良好で、ザク・マリナーより巡航速度は速い。

こうして、一年戦争時の水陸両用機よりも大幅な性能アップを果たしたカプールだが、根本的な疑問も残る。それは、アクシズ（ネオ・ジオン）はなぜカプールを開発したのか、ということだ。ジオン再興というアクシズの目的を考えれば、地球侵攻に備え、自車で使う水陸両用機を揃えておくためで



航行形態

手足を収納してボールのように丸まった状態で航行する。海中のみならず、海上を水バレーのように疾走することもできる。

はないだろう。実際には共同関係にあった地球各地で活動が続けるジオン公国軍残党に供与し、その活動を支援する目的で作られたと考えるべきだ。

先に述べたようにカプールの性能は一年戦争期の水陸両用機と比べ進化しているが、一年戦争期の一般的なモビルスーツと、第一次ネオ・ジオン戦争期の一般的なモビルスーツの性能差に比べればその幅は小さく、目的に特化した特殊な装備や機構はない。

しかしそれは、性能的に均一化することで、ゲリラ的な組織でも運用しやすい機体として作られたからではないだろうか。例えば粗末な基地でも整備でき、何の訓練も受けていない民間人の子供でもすぐに操縦できる。水陸両用機としてのカプールの特徴は、そういった特殊な運用形態でも機能できる点にあるといえる。

ところが現実的には「地球の本物の海」を知らぬスペースノイドが開発したということで、カプールを用いる旧ジオン公国軍残党には信頼されず、皮肉な形になってしまった。

◆設定画はP115へ

主な配備地域

カプールは水陸両用機であるため、小惑星（コロニー）を拠点とするアクシズ自身より、地球に存在するジオン公国軍残党がアクシズからの援助として受領し、配備を進めていた。ザク・マリナーなどとの混成部隊としてゲリラ的な運用をされることもあり、その際には現地の少年兵が操縦を行うことすらあった。



★アフリカ南端のザウのジオン軍残党部隊は、陸下してゲリラ活動中。



★記憶されても古参のパイロットは信頼性の点から、操縦を注げる傾向がある。



連邦軍(ジム)系

通常海軍力の高さゆえに突出した性能の機体は誕生せず

高性能化に腐心したジオン公国製水陸両用モビルスーツとは大きく異なる。地球連邦軍の水中用モビルスーツ事情。それは一体どのようなものだったのだろうか。

沿岸警備が行える 程度の能力で十分

一戦戦争の長期化にともない、ジオン公国軍は地球進攻作戦を開始した。

北米大陸などの足がかりを手にしたジオン公国軍は、地球連邦の輸送網を断つべく通商破壊作戦を行うほか、海から沿岸基地を攻撃・占拠し勢力の拡大を図る。これらの活動で主役を務めたのは、水陸両用モビルスーツであった。しかし、地球連邦軍はこれらジオン公国製水陸両用モビルスーツに対抗する水陸両用(あるいは水中用)モビルスーツを開発することには消極的であった。

その理由はいくつか挙げられるが、ひとつは0079年11月のオデッサ作戦の勝利。そして直後のジャブロー侵襲。食い止めたジオン公国軍の地球に

おける勢力圏を急速に縮小させることに成功し、宇宙へ追いやったことがあげられる。つまり、その脅威は徐々に縮小していったということだ。

地球連邦軍がはじめて量産したモビルスーツはRG・79だが、ジムの量産化が軌道に乗ったのが0079年10月だ。つまり、ジムをベースにするなり新規に作るなりで地球連邦軍が水陸両用モビルスーツを開発し、配備を終える頃にはその意味が薄らいでしまっていたのだ。それよりは来るべき宇宙やコロニーでの法戦に備え、通常(金主用)のジムあるいは派生機開発に注力する方が合理的である。

もう一つは、スペースコロニー国家のジオン公国との違いだ。そもそも海洋戦力の多くが失われ、実質戦力は逼迫していたとしても、連邦軍には海洋作戦でのノウハウが蓄積されており、

地上や宇宙の戦いと同様、モビルスーツへの対策方法も徐々に確立されていったと見られるからだ。核融合炉を搭載した水陸両用モビルスーツの速力や航行能力は非常に高いが、ガンバリー搭載の対潜ミサイルでスコップなどを撃破したケースもあり、戦術を適応させれば既存の対潜兵器や戦術の応用で対処も十分可能だったのだ。

そんな中で地球連邦軍により開発された水中用モビルスーツはRG・79アーク・ジムは、拡張性の高いRG・79ジムを改修し、水中用推進器や対艦船用の魚雷やミサイルを装備したという、ある意味でジムのバリエーションとして至極オーソドックスな造り方がなされている。ジェネレーター出力もベースのジムとはほぼ変わらず、ジオン公国軍が水陸両用機で実現してみせたような意欲的な装備やシステムもない。

それは伝統的な海軍力を持つ地球連邦軍が水中用モビルスーツに求めた能力が、沿岸警備的なものの近かったということなのだろう。

ジオン公国軍の水陸両用モビルスーツや艦艇と戦うにしても、味方艦艇や航空戦力と連携して事にあたることができ、そのため、モビルスーツが必要とされる状況は、洋上ではなく、上陸作戦を阻止するという一点においてで充分だった。つまり、単機あるいは少数で、あらゆる海軍的な任務にあたらなければならないジオン公国軍の水陸両用機とは、使われる状況が全く異なるのだ。結果的に高性能である必要はなかったのだろう。

アーク・ジムは後継機が造られることもなく、0090年代に入っても現役で使われ続けた事実がそれを物語っているといえるだろう。

➡ 体形

ジムをベースにしているため、ジオン公国軍の水陸両用機に比べ人型により近いシルエットである。その分耐圧深度や速力は低め。

➡ 推進器

肩や腰部、背中に水中用の推進器を装備。計測方法（表記方法）が異なるのか、ジオン公国軍の水陸両用機より推力の数値はかなり低い。

➡ 武装

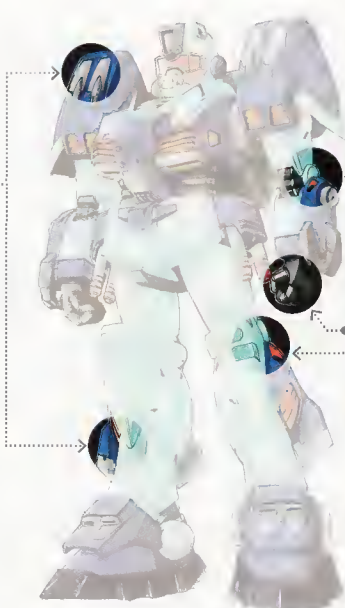
魚雷や水中用ミサイルなどが主武装で、陸上で使える兵装は皆無。陸上では陸上に適した機体運用すればよいという、数に便れる連邦軍らしい「分業」の姿勢が表れる。

➡ 関節部

膝の裏や肘などは防水のためシーリングが施されている。

➡ マニピュレーター

5本の指を持つマニピュレーターを採用しており、作戦内容によって使用する武器を変えたりと、ある程度の汎用性を持たせることが可能。また沿岸警備という本来の任務のほか、水中での作業などにも機体を使用できる。



アクア・ジムの進化

UC.0079

RAG-79-G1

水中型ガンダム

頭部アンテナ形状からガンダムと名づけられたが、実態はアクア・ジムの武装や推進器に小変更を加えたもの。



UC.0079

RAG-79

アクア・ジム

RGM-79ジムを基に各種水中用装備を付加。完成度は高いとはいえないが、戦後も長く使われ続けた。



アクア・ジム

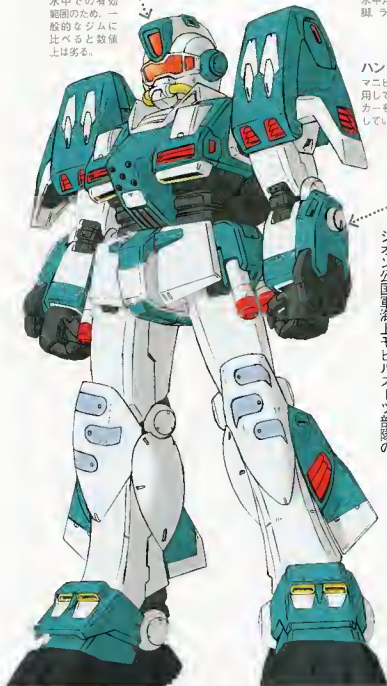
Spec

頭頂高：18.0m
 本体重量：49.5t
 全備重量：64.3t
 ジェネレーター出力：1,280kW
 ハイドロジェット総推力：8,950kg
 センサー有効半径：4,300m
 装甲材質：チタン・セラミック複合材
 武装：魚雷バッド×2、大型魚雷×2
 ミサイル・ランチャー
 ビーム・ピック×4

センサー……
 水中での有効
 範囲のため、一
 般的なジムに
 比べると数値
 上は劣る。

推進器
 水中用の推進器を同
 期、ランドセルに増設。

ハンド・アンカー
 マニピュレーターを採
 用しているため、アン
 カーを胸部に別に装備
 している。



敵と戦うばかりが
 任務ではなかった!

RAG-79 アクア・ジムは地球連邦
 軍の主力モビルスーツであるRGM-
 79ジムを使った水陸両用機だ。

関節に防水処理を施し、ランドセル
 をハイドロジェットのユニットに交換
 することで水中での機動性を確保。武
 装は標準&大型サイズの魚雷を中心
 にした雷撃戦仕様となっていた。

本機は、性能的にも武装的にも公国
 軍の水陸両用機と、水中で雄雄を決す
 ことができる機体ではなく、ユーコ
 ン級やマッド・アングラードといった
 ジオン公国軍海上モビルスーツ部隊の

母艦を叩くための機体であるといえる
 だろう。

水中戦に特化した設計や機体形状を
 持つジオンの水陸両用機に対抗する機
 体を開発するには、それなりの時間か
 かる。それよりも母艦を破壊するほ
 うが効率がいいという考えだ。

また、コーストガード的な役割もあ
 るといえるだろう。沿岸警備網の一翼
 として機能し、潜水艦などの戦艦を行
 い、モビルスーツとの本格的な戦闘は対潜
 哨戒機や基地防衛の陸戦部隊に任せる。
 アクア・ジムは、様々な兵器と連携体
 制を敷き、状況に迅速な対応をするた
 めに必要な機体と言えるだろう。

← 設定画はP124へ

主な配備地域

ダカール沿岸やアマゾン川河口など、海に
 面した重要地点には必ず配備。また、味方
 艦艇や航空機とタッグを組み外洋で「ジョ
 ン潜水部隊狩り」にも参加。



vs水陸両用機

連年の魚雷艇の浸透で航行するジオン潜水
 艇両用機を魚雷で倒すのは至難の技。反面、
 敵には滅殺するといはれメガ粒子兵装があ
 る。戦況的にはやや不利。



武 装

魚雷のほか、先端を敵艦の装甲に押し付け
 るとスイッチが入りビームが発生するビー
 ム・ピックと呼ばれる近接用兵装も持つ。
 ビーム・サーベルより効率的。



type Gun dam

■ RAG-79-G1

水中型ガンダム

Spec

頭頂高：18.3m
 本体重量：47.7t
 全備重量：58.5t
 ジェネレーター出力：1,330kW
 ハイドロジェット総推力：9,670kg
 センサー有効半径：4,600m
 装甲材質：チタン・セラミック複合材
 武装：魚雷×2、ビーム・ピック×2
 炸裂式ハーブーン・ガン
 水中用偏光ビーム・ライフル

ジェネレーター出力

偏向ビーム・ライフルを使うため、若干出力がアップしている。

推進器

腕のユニットを小型化し、逆にラントセルを大型化している。ハーブーンガンや偏向ビーム・ライフルを構えたままの航行がしやすくなった。

アンテナ

アンテナ・シムと異なりV字アンテナを装備。このアンテナゆえに水中用「ガンダム」と呼ばれる。また、頭部には潜望鏡が内蔵される。

エネルギーCAP技術の優位を 水中用モビルスーツに投入

RG M・79ジムはジオン公国軍の水陸両用モビルスーツと比較すると、そうしてもスペックや武装の面では見劣りがした。そのためRAG・79をベィスに、対モビルスーツ戦闘を行うことがでる機体も開発された。通常はガンダムからジムへという開発の流れがあるが、本機は外見がガンダムに似ているからガンダムと名付けられたという経緯があり、RX・78ガンダム直系の機体というわけではない。

このRAG・79・G1水中型ガンダムは、ランドセルや脚部の推進器を新型に換えられているほか、武装もアクア・ジムとは大きく異なっている。もっとも大きな違いは水中用偏向ビーム・ライフルを装備している点だろう。これは水中でのビームの減衰をおさえるためにビームの収束率を高めたもので、通常ビーム・ライフルよりビームが細くみえるという特徴がある。この装備により、ジオン公国軍の水陸両用機に対して、少なくとも武装の面では対等以上といえるだろう。本機は一部のエース用の機体とされるが、戦闘記録がほとんど残されていないため、その真偽は不明である。

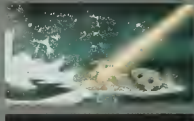
主な配備地域

アクア・ジムと大差はないが、より直接的な水陸両用機との戦闘を考慮した対潜作戦や警備地域には積極的に投入。パイロットも選抜された優秀な者を擁収させた。



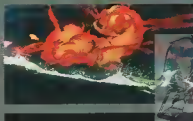
vsジオン公国製水陸両用機

武装の変更によりジオン公国製水陸両用機との戦闘はアクア・ジムより有利となった。ジェネレーター出力は比較して低いが、エネルギーCAP技術でそれを補う。



武装

魚雷のほか専用装備として偏向ビーム・ライフルを持つ。また、近の先頭には炸薬を仕込み、装甲を突き破った後に爆発させるといってハーブーン・ガンも新しい装備。



■ ZMT-D15M

ガルグイユ

Spec

頭頂高: 14.2m

本体重量: 9.8t

全機重量: 26.2t

ジェネレーター出力: 5,420kW

スラスタ総推力: 60,260kg
(17,720kg×2, 12,410kg×2)

装甲材質: チタン合金ネオセラミック複合材

武装: 内蔵式ビームガン×2

3連魚雷ポッド×2

ビーム・サーベル×2

ビーム・ライフル、他

コクピット

コクピット内のいたるところにハネスが露出しており、試作が突如として作られたことをうかがわせる。多少のダメージで浸水してしまうこともあった。

魚雷

カルグイユのモビルアーマー時の主兵装。胸部を覆うコーンにヘッド・ミサイルとして使用できる。



クロー・アーム

左腕だけがクロー・アームで、右手は普通のマニピュレーター。陸上での格闘にはビーム・サーベルも使用する。



航行モード

変形機構はヘースとなったアヒゴルと同じ。というよりはこの変形機構に目を付け、アヒゴルをヘースとしたのだろう。

水陸両用モビルスーツは
技術革新の波に飲まれた

ZMT-D15Mガルグイユは、ザンスカル帝国によって開発された試作水陸両用モビルスーツである。まったく新規の機体ではなく、宇宙用のモビルスーツ・ZMT-D11Sアヒゴルをベースに改修が行われている。

武装はミサイルではなく魚雷を装備しており、左腕はワイヤー付きのクロー

・アームで手首から先を射出することとも可能。アヒゴル譲りの変形機構も残されており、海中では水の抵抗の少ない航行モードをとることができる。

しかし急造品のため全体的に完成度は低く、ザンスカル帝国の水陸両用モビルスーツはこのガルグイユのみで終わった。スペースノイドが地球を制圧するために水陸両用モビルスーツを用意するという状況は同じだが、終戦まで水陸両用機にこだわったジオン公国と、すぐに見切りを付けたザンスカル帝国との差異が表れた部分である。その理由も端的に言えばモビルスーツ開発関連技術の進歩にあった。

宇宙世紀0150年代に入ると、ミノフスキー物理学をはじめとする基礎的な分野の技術の底上げが進み、ミノフスキーフライトシステムやビーム・ロケットの開発によりモビルスーツは単機で空を飛べるようになっていた。海中と空を行く両者の速度を考えれば、奇襲・揚陸用モビルスーツとしての水陸両用機の意義はすっかり薄れていたのである。また、一般的なモビルスーツで水中戦を行うことも不可能ではなくなった(宇宙世紀0080年代でもハイエンド機はその傾向があった)ため、特に水陸両用機を作る理由が存在しなかった。ガルグイユが量産されたことなく試作機で終わったのも、ある意味必然といえる。

■ ZMT-A31S

ドッゴラ

Spec

全長：369.3m
 本体重量：51.9t
 全備重量：146.3t
 ジェネレーター出力：11,920kW
 スラスター総推力：548,460kg
 (54,960kg×6、20,170kg×10、
 85,000kg×2)
 装甲材質：チタン合金ネオセラミック複合材
 武装：ビーム砲×10
 ミサイル・ランチャー×2
 腕部ビーム・ガン×2
 テール・ビーム・ガン×2、他

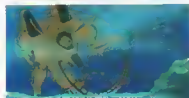
全環境に適應させた
超大型モビルアーマー

ドッゴラはザンスカール帝国の開発した試作モビルアーマーで、最大の特徴はその構造にある。コンテナ状のブロックを無数につなぎ、まるで蛇のように長く伸ばしたテール・ラッドと呼ばれる「コンボイ・ネットと本体（蛇の「頭」に相当する）」とで構成されている。このテール・ラッドのブロックはダメージを受けた場合そのパイロットのみを切り離し、前後をつなぎなおすことでダメージの影響なく戦闘を続けることができる。

また、このテール・ラッドを切り離して複数のユニットとしてフォーメーションを組んだりといった、通常のモビルスーツやモビルアーマーでは真似

武装

ビーム兵器からミサイルまで一通り持つが、変わったところではモビルスーツを総めとる射出式ネットを腕に内蔵している。



テール・ラッド

四角いコンテナ状のパーツを蛇の胴体のようにつなぎ合わせる。長さは約370mにもなる。コンテナ一つ一つがアノジモーターを持ち、尻尾のように運動する。

のできない独自の戦法、戦術をとることも可能だ。テール・ラッドを構成するコンテナには、その一つ一つにアノジモーターが内蔵されており、その総数は1696個にもなる。

ドッゴラは特殊な存在だが、水中用モビルアーマーとして開発されたわけではなく、宇宙空間から大気圏、水の中までと全環境で運用できる機体だ。バイク戦艦アドラステアのように、ザンスカール帝国は地球制圧の際も、宇宙で使用できる兵器をそのまま地球上でも使おうとする傾向があった。ドッゴラの万能性も、このザンスカール帝国の志向に連なる機体だ。このような万能性を求める理由も、コロニーで長年暮らし続け「地球のことはよくわからない」スペースノイドが、宇宙世紀0150年代の高度な技術で

本体

本体はモビルスーツの上半身に近い。胸部に2門のミサイル発射口があり、水中戦ではこのミサイルを主に使う



強引に兵器を地球上の環境に適應させようと試みた結果ということが出来るだろう。実際、ドッゴラも海中ではV2ガンダム以上の能力を発揮していたから、その目論見は一応は成功したのだらう。



水陸両用モビルスーツの

迷彩

AMPHIBIOUS
MOBILE
SUITS

水陸両用MSのカラバリエーションを考える

機動戦士ガンダム の登場士には、モビルスーツの塗装はいわゆる、設定
 砲台、刀は一種類で、時々迷彩（金通い）が登場する程度だった。し
 かし、アニメーションの世界を少し離れ、宇宙世紀という世界で美脚に
 何が行われていたかというのを考察してみると、おそらく様々な状況
 にフィットさせるために多種多様な塗装や迷彩があつたのである。むしろ、
 「宇宙世紀の世界で遊ぶ」ことには、そういったことを想像するのさ
 らしきものがあつたといえるのだ。

と書いて、このページでは水陸両用モビルスーツの塗装を考えて
 みたい。なお、ここに登場する機体の設定は、本誌独自「これらしく」
 を考え、また、この登場する機体の設定は、本誌独自「これらしく」
 ないことを付け加えておく。つまりモデルなどを独自の塗装で表現する時の、
 参考となるになれば幸いである。

ジャングル地帯を
想定した迷彩

MSN-03

ジャブロー攻略前哨戦
通商破壊作戦機カラー

機体設定

0079年10月頃に通商破壊作戦のため、主に北大
 西洋の作戦海域に投入された機体。艦隊旗艦マッド・
 アングラを補給・整備拠点とし、致意のユーコン
 からなる潜水艦隊に所属し作戦行動を行っていた。

機体解説

陸上での行動時間に制限のあったゴッグであった
 が、洋上での運用には制限もなく、また、フリージ
 ヤードが密着護衛や港湾に敷設された機雷除去に
 有効なため、通商破壊作戦に多くの機体が投入された。
 生産開始後の初期に実戦配備され、0079年10月
 頃に通商破壊作戦のため、主に北大西洋の作戦海域に
 投入された。ジャブロー攻略戦が失敗に終わった後
 も同海域で、通商破壊作戦、港湾施設への攻撃など
 をゲリラ戦的に継続投入され、終戦まで連戦を演じた。

塗装解説

北大西洋を作戦海域とした当時の塗装は、海洋哺
 乳類もしくは大型魚類を模したと思われる暗いシー
 ブルからシググレイが背面から側面に、薄いグ
 レーを正面腹面に塗装され、主に海面直下の極浅い
 水深を潜航遊弋し、敵艦隊を探索、攻撃するのを目
 的としていたようである。機体にある赤い数字の
 「703」はユーコン「U-707」所属の3号機と言
 われ、基本的にユーコン1隻には2機のゴッグが搭
 載された事から、マッド・アングラに残された予
 備機と思われる。また、コクピット脇にキルマー
 から、戦果として4隻の輸送船を撃破したようであ
 る。機初期の塗装のみに機体番号や所属が判る記入
 があつたようだ。

海洋哺乳類もしくは
大型魚類を模した迷彩



ジャブロー攻略前哨戦 偵察機カラー

設定設定

0079年10月に、ジャブロー攻略の前哨戦であるジャブロー近隣の連邦軍拠点への攻撃に際し、前線偵察作戦に投入された機体。

機体解説

ジャブロー攻略の前哨戦であるジャブロー近隣の連邦軍拠点への攻撃に際し、事前偵察を行うべくアッガイが投入され、上陸もしくは河川を遡上し偵察任務を行った。この機体も0079年10月に、前線偵察作戦に投入された機体。南米にあるジャブロー攻略戦に際して障害となり得る基地を目標として偵察作戦を行った。同様の作戦を繰り返したのち、ジャブローへ偵察を行っていった。攻め戦後、当機は海軍の偵察隊に所属しジャブローを含む南米を作戦地域とし偵察活動を続け、カリフォルニアベース陥落後、連邦軍に回収された。

塗装解説

当機は当作戦時、偵察場所が泥濘地もしくは爆撃による荒地とした地帯だったようで、基本塗装のブラウン、グレー部分をカウンスターシェード化した塗装で作戦を行った。夜間の上陸、その後移動を繰り返し、暗い塗装の為、昼間はほぼ動かず視認するのが偵察行動のパターンであった。偵察部隊はジオン各軍が個別に持っていたが、水陸両用MSのみは海軍及び海兵隊での運用だった。ただし、当機を含めジャブロー攻略戦時にはノーマーキングだった為、この時点での所属は不明である。



MSM-03

ジャブロー攻略前哨戦 上陸戦機カラー

設定設定

0079年11月のジャブロー攻略の前哨戦として行われたジャブロー近隣の連邦軍基地攻略戦に投入された機体。

機体解説

ジャブロー攻略戦のために開発されたゴッグが、その目的通りの作戦に投入されたのが当機。0079年11月のジャブロー攻略の前哨戦であるジャブロー近隣の連邦軍基地攻略戦に投入された機体で、南米のジャングル地形にある基地を攻撃目標として、沿岸部より先行上陸、制圧攻撃を行い後続部隊の橋頭堡を築く任務にあたった。同様の作戦を繰り返してジャブローへ迫って行き、作戦開始への筋道をつけた。ジャブロー攻略戦本戦にも投入されたが、ジャブロー基地付近に迫った際に撃破された。

塗装解説

前哨戦であるジャブロー近隣の連邦軍拠点へ先行上陸し橋頭堡を築き制圧する作戦に投入された際に、ジャングルの地形を想定した濃いグリーンとオリブグリーンで塗り分け、頭から被ったような形状のブラックグリーンの塗装が施された。推測では、化け物のような塗装で驚かせたり、恐怖心を煽ろうと意図したもののようなが、実際の部隊員の証では「巨大スライム」とあだ名されていた。爪もブラックグリーンで塗装されているが、水陸両用モデルスーツにとって、爪の使用は頻繁で塗装してもすぐ剥がしてしまうとので初期を除き、以降ほとんどの機体が無塗装であった。



泥濘地もしくは
爆撃による
荒地用偵察迷彩

東南アジアに多い
深いジャングルに
適応させた迷彩

MSM-04

東南アジア 偵察機カラー

設定設定

ジャブロー攻略戦で偵察作戦に投入後、0079年12月に東南アジア戦域の偵察部隊へ再配備となった機体。

機体解説

0079年12月に東南アジア戦域の偵察部隊へ再配備となった機体。その際、海軍偵察部隊へ配属され、東南アジア戦域の部隊所属となった。この東南アジアを作戦地域とする部隊は偵察のみが任務でなく、軍施設やインフラなどを攻撃・攻撃するゲリラ戦部隊で、軽快な運動性が特徴のアッガイのみで編成され、作戦を終戦直前時まで継続した。所属部隊は終戦直前に解散したため、部隊の詳細やこの機体のその後は不明となっている。

塗装解説

この機体はその部隊の代表的な迷彩塗装を施している。基本塗装の薄いグリーンの上にやや濃いグリーンとブラックグリーン、ブラウンで横縞模様に迷彩が施され、東南アジアに多い深いジャングルに適応させていた。当機を含め所属全機はノーマーキングだったと言われる。また、基地を海上のマッド・アングラーとしていたとの事で、一部の機体には海戦旗が描かれていたとも言われるが真偽は不明である。この機体はジャブロー攻略戦時も同様の迷彩だったと言われる、濃いは薄いグリーン部分をブラウンとし南米のジャングルに合わせたように、再配備後も同様の海軍部隊に所属していた可能性が高い。





MSM-07

ジャブロー攻略前哨戦 夜戦仕様機カラー

機体解説

0079年11月頃、ジャブロー攻略の前哨戦として行われたジャブロー近郊の連邦軍基地攻略戦において、夜戦における奇襲を前提とした機体。

機体解説

この機体の所属部隊は、ゴッグを先方に敵前へ強襲する大規模な上陸作戦ではなく、ズゴックの陸上行動時間の長さを生かした沿岸より深部にある敵基地への浸透奇襲攻撃を数多く行った。部隊の詳細は不明であるが、ズゴックのみで編成された独立した強襲部隊であったようで、偵察部隊と連携した情報をもとに小規模な制圧作戦に従事していたようである。ジャブロー攻略戦にも参加、後も継続して南米地域で同様の作戦を行ったとの事である。

塗装解説

陸上奥地に浸透奇襲攻撃を行うべく現地にて迷彩された当機は、ズゴックの基本塗装の上からブラックをオーバースプレーされているようで、塗料の品質が悪いのか、エッジの部分には塗料が束らず地色が透けている。また、機体全面でなく胸部と脚部は半分しかオーバースプレーされていない。その事から、当機は作戦開始前に急遽、夜戦を意図した即席塗装を施されたようである。当部隊の所属機は最夜、場所を問わずに作戦を遂行し、その都度、簡易ながらも作戦環境にあった迷彩を施されていたとの事である。



夜戦を意図した
即席塗装



ズゴックの
基本塗装を
応用した迷彩



MSM-07

南太平洋 通商破壊作戦機カラー

機体解説

0079年12月にユーコン艦戦の通商破壊作戦部隊配属となり、南米からオーストラリア近海まで含む南太平洋地域を作戦海域とした。

機体解説

当機はジャブロー攻略戦後における水陸両用MSの残存機体の再配備で、0079年12月にユーコン艦戦の通商破壊作戦部隊配属となった機体。南太平洋地域を作戦海域とし、ジャブローからのオーストラリアや東南アジア向け輸送を断絶すべく活動した。輸送船団護衛の潜水艦と至近距離で会合、水中での機動力を活かしクロー攻撃を仕掛けるが潜水艦に近付き過ぎたために衝突、海中へ没した。潜水艦の被害は軽微で、唯一の潜水艦による撃破として記録されている。

塗装解説

当機の迷彩は主に海中での活動を重視したもので、ズゴックの基本塗装に使用された濃淡2色のブルーと濃いたブルグリーン1色で不規則な模様様の迷彩を施された「カエルのタマゴ迷彩」と呼ばれている。胸部、脚部の一部や足首は迷彩を施していないが可動部の為、擦れて剥げるのを嫌ったようである。多くのズゴックは、明るい海域では基本塗装が水中での迷彩効果に優れていたためか大膽な塗色変更例は少ない。また、多くの水陸両用MS同様にもは無塗装。



北海 通商破壊作戦機カラー

機体解説

0078年12月に北大西洋から北海までを含む北西ヨーロッパ方面を作戦地域とした通商破壊作戦および施設破壊工作に投入された機体。

機体解説

北大西洋から北海までを含む北西ヨーロッパ方面を作戦地域とした通商破壊作戦および施設破壊工作に投入され、通商破壊作戦も行いながら連邦軍のベルファスト基地を頻りに襲い、連邦からは「ノルト・ワン」とコードネームをつけられ襲撃の対象とされていた。連邦側の記録によると、数度目のベルファスト襲撃の際に陸上からの大口砲撃が左肩部を直撃、小爆発をおこし戦場から離脱。その後、損傷によりパラスタングをやられたのが海面下すれすれを逃走中のあるところを哨戒中の2機のドン・エスカルゴにより発見され、撃破された。

塗装解説

当機の迷彩は再配備後に塗り直されたと思われる、冬の北方洋を意図した薄いグレー、ブルー、グリーンの色を使い、パターンも幾何学模様で施された。この迷彩はよく船舶に施されているもので、ソックの大きさをから選ばれたものであろう。この機体は陸上攻撃した記録はないから、洋上からの攻撃に耐えていたためこの迷彩にも納得がいく。ソック自体の生産数数が少ない事と、各機体はおのおの独自の迷彩が施されていたように、その迷彩の特徴から当地の連邦軍側から個別のコードネームを付けられ動向を注視されていた。



冬の北方洋を
意識した迷彩

MSM-10

地中海 通商破壊作戦機カラー



機体解説

0079年12月、東部ヨーロッパ戦線を脱いで地中海に派遣された機体。通商破壊作戦の他、海上からの地上軍援護射撃も行った。

機体解説

0078年12月、北大西洋から北海までを戦域とした通商破壊作戦および施設破壊工作に投入されたが、直後、オデッサ戦後急速に悪化した東部ヨーロッパ戦線を脱いで地中海に派遣された機体。通商破壊作戦の他、海上からの地上軍援護射撃も行った。これにより「メッド・ワン（地中海の大物）」と連邦からコードネームをつけられていた。この機体は、主にバレルカン半島沖からアレキサンドリア近海にて活動時に陸上支援攻撃などで幾度も損傷を蒙りながらも撃破されず、終戦時においても健在で、その後はアフリカ方面のジオン残党軍に参加したとされている。

塗装解説

当機も「ノルト・ワン」同様、ジャブロー戦時では違った迷彩だったと思われる。地中海派遣にあたっての迷彩は、基本塗装の薄いグリーンの上に濃緑で程やかな地中海を意図した濃いグリーンとほぼブラックに近いグレーの2色を、独特なドットパターンで幾何学模様を描いたものにされた。この迷彩は遠方からパターンがかなりぼやけて見えたので、海上からの攻撃に終始していた事から選ばれたのであろう。ただ、迷彩の効果でこの機体が生き残ったとは思われず、パイロットの技量に負うところが大きいと推考される。

程やかな海を
想定した迷彩





出張版

ヤマザキ軍曹のプラモバカー代 水陸両用機MS考



このページでは、本書の母体でもある季刊誌『グレートメカニックDX』でおなじみのコーナー出張版。プロモデラー、ヤマザキ軍曹による立体から考察する水陸両用MSをお届け！

お題は1年戦争の水モビルスーツ、ズゴック&ゴンドラ。このMSは、ズゴック（MS-07）とゴンドラ（MS-07S）の2機を合わせたものをイメージして作られています。

立体的なアプローチで考える



MSM-07 ZGOK ズゴック

すでに発売から7年以上を過ぎたキットでありながら、フォルム、可動共にいまだ色あせない完成度誇るMGらしいキット。

MG 量産型ズゴック
1/100スケール組立プラキッド
2003年5月発売
価格：3150円（税込）
発売元：株式会社バンダイ





それぞれの機体の特色を



MSM-03 GOGG

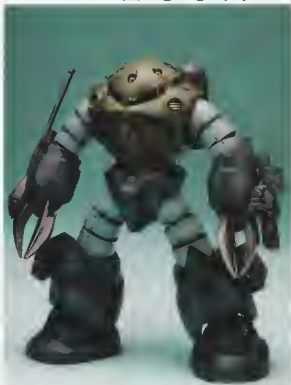
ゴッグ

完成したそのボリュームは、価格以上の満足度！
少ない部品点数ながら水中航行形態の可変機構まで再現した好キット！

MG ゴッグ
1 100スケール組立プラキット
2003年6月発売
価格：3675円（税込）
発売元：株式会社バンダイ



MSM-07 ZGOK



劇中、ガウ攻撃空母からジャブローに降下した部隊の1機を想定して製作。さすがにあの装備・あの色でジャングル戦闘はヤラレに行くようなもんでからねえ。

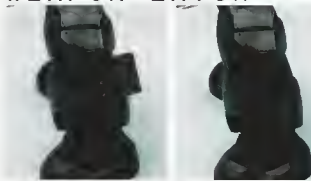
HEAD



頭

▲通常の海戦用の水色から急遽ジャングル戦用の迷彩が施され、周辺にはカモフラージュネットを取り付けるフックも追加。

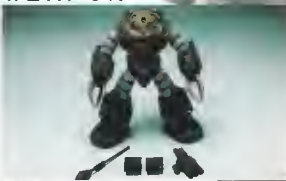
WEAPON LATCH



オプション用ウェポンラッチ

▲胸部・脚部には武器搭載用のマウントを増設。オモチャのブロックを本体・武器に取り付け、取り外しが可能なマウントとしてある。

WEAPON



武器

▲後に生まれたガンダム作品に登場したジオンMSの武器を追加。ジャブロー戦に登場したジャイアント・バスのグフへのオマージュ。

スゴックorゴック?
選択で迷ったあけく……



全画の「モビルスーツ全集・水陸四用MS編」では、スゴックとゴックのどちらか……と思っていたんだけど、結局選択できず「両方」って方向に……。フリージャーヤードもないのに機體資源に入っていたカンドクです、ハイ。

量産型スゴックでは、ガウ攻撃空母に搭載され、ジャブロー攻略の降下作戦に投入された機体を想定。

この際、水中戦闘よりも湿地戦闘が行動の大半を占めると考え、上半身の塗装は海戦用からジャングル戦に対応するために迷彩塗装（イメージはベトナム戦争時に誕生したタイガーストライプ）を施した。

腹部には前回の戦闘で受けた被弾箇所をカバーしたパッチ状の追加装甲を追加。左右腕部には武器マウントを増設。右手には「0083」に登場したジオン軍MSの携行火器「バンツァーファウスト」、左腕には「08小隊」に登場したグフ・カスタムの装備「3連ガトリング砲」を追加。脚部にザク用の「3連ミサイルボット」も増設。

映像内でもジャブロー攻撃戦はグフでさストムのジャイアント・バスで出撃する決戦（のハズ）。湿地となるジャングル戦では腕部のメガ粒子砲の威力も一定せず、頭部の6連ロケットランチャーは

MSM-03 GOGG

ゴッグは劇中のベルファスト基地への強襲作戦をイメージして製作。「水を吸い込む」「やたら重い」に重点をおいて、映像でのゴッグを表現。やっぱり「怪獣」ですね。

HEAD



頭部&ランドセル

▲耳(?)にあたる部分、ランドセルの水流ジェットの取水口を追加。「さすがゴッグだ何ともないぜ!」のフリー・ジャーヤード射出口も新造。



SHOULDER & ARM



肩部と腕部収納

▲装甲板張りのリムを追加。キットは普通に組んでも腕・肘の引き込みが可能で遊具形艦に変形。「初の変態MS」なんだよな、ゴッグって。

BALLAST



腰部分とバラスト装備

▲腰周りに上部にも取水口となるダクトを増設。四角い箱状の物はバラスト。深く潜るためにオモリはけっこう重要なアイテム。

そのガンダムを羨望の眼差しで見つめる。これぞガンダムの楽しみの本流だと思ふな。

ゴッグのイメージだよ!

ブームによる「妄想MS製作」これぞガンダムの楽しみの本流だと思ふな。

ゴッグのイメージだよ!

ブームによる「妄想MS製作」これぞガンダムの楽しみの本流だと思ふな。

ゴッグのイメージだよ!

ブームによる「妄想MS製作」これぞガンダムの楽しみの本流だと思ふな。

ゴッグのイメージだよ!

ブームによる「妄想MS製作」これぞガンダムの楽しみの本流だと思ふな。

ゴッグのイメージだよ!

ブームによる「妄想MS製作」これぞガンダムの楽しみの本流だと思ふな。

ゴッグのイメージだよ!

ブームによる「妄想MS製作」これぞガンダムの楽しみの本流だと思ふな。

ゴッグのイメージだよ!

ブームによる「妄想MS製作」これぞガンダムの楽しみの本流だと思ふな。

ゴッグのイメージだよ!

ブームによる「妄想MS製作」これぞガンダムの楽しみの本流だと思ふな。



機動武闘伝 Gガンダム

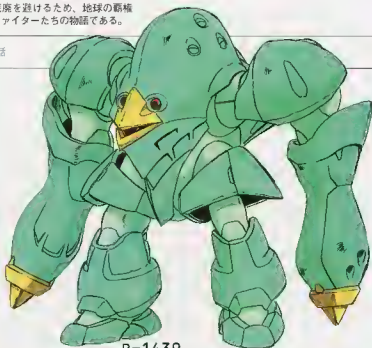
初代『ガンダム』の富野由悠季監督以外の手による初のテレビ作品。宇宙世紀を舞台にしないのも特徴。主役メカもモビルスーツ（MS）ではなく、モビルファイター（MF）と呼ばれるロボットが活躍する。未来世紀（FC）、戦争による荒廃を避けるため、地球の覇権をかけて戦うガンダムファイターたちの物語である。

DATA ●放映年：94年4月～95年3月 ●一話：15分 ●テレビ朝日 ●話数：全49話



GF13-026ND マーメイドガンダム

ネオデンマーク所属のMF。ガンダムファイターは、ハンズ・ホルガー。第29話「試合放棄!」で、恋にドキドキ、サイ・サイシーから登場。



P-1439 ベスカトーレ

ネオメキシコの水陸両用MS。逃亡したガンダムファイター（チコ・ロドリゲス）を捕らえるために使用された。第7話「来るなら来い!」で必死の逃亡者に登場。



▼フィッシュモード



▲オーセベリーモード

GF13-012NN バイキング ガンダム

ネオノルウェー所属のMF。ガンダムファイターはエリック・ザ・バイキング。ガンダムでありながら、その活躍はイマイチ。第21話「決勝迫る! タイムリミット3日前」から登場。



ALL GUNDAM AMPHIBIOUS MOBILE SUIT&ARMOR オールガンダム水モビ 大集結!



このページでは、本誌に掲載されている宇宙世紀を舞台としたガンダム作品以外のガンダムシリーズにスポットをあてて、各作品に登場した水陸両用（水中用）のMS、MAなどを取り上げてご紹介!

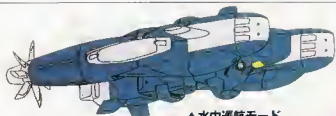
©創通・サンライズ ©創通・サンライズ・毎日放送





『Gガンダム』の番組枠の次作であり、前作同様、宇宙世紀を舞台にしないガンダム作品。前作が格闘熱血系が根ものに対し、今作は『ガンダム』と同じミリタリー路線のシリアスな内容。A.C.（アフター・コロニー）195年、地球圏統一を画策する秘密結社OZとそれに反抗するガンダムと戦士たちの物語である。

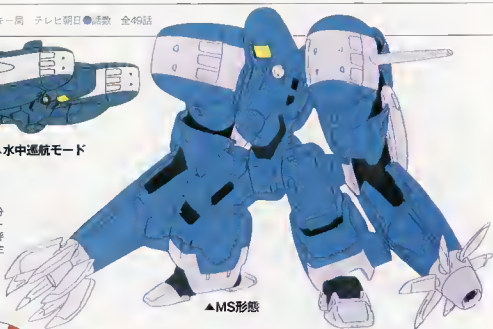
DATA ●放映年：95年4月～96年3月 ●キー局：テレビ朝日 ●話数：全49話



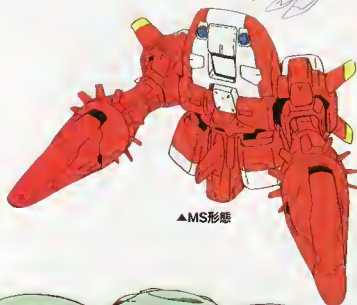
▲水中巡航モード

OZ-09MMS バイシース

OZの水中用可変MS。先端部分には作業用マニピュレーターを備える。第2話「死に神と呼ばれるガンダム」から登場。主なパイロットはミュウ。



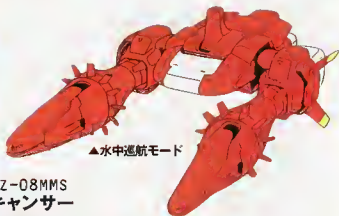
▲MS形態



▲MS形態

OZ-08MMS キャンサー

OZの新型水中用MS。バイシースと共に物語の冒頭から登場。主なパイロットは、トルギスに真二つに裂かれたのが印象深い、アレックス。



▲水中巡航モード

▽ガンダム



『ガンダム』放映から20周年にあたる年に、富野由悠季監督の手による新たなガンダム。ガンダムというタイトルでありながら、物語の内容はどこか牧歌的な異色作。月からディアナカウンター襲撃により、突如目覚めたマガンダムと、それに飽きり込んでしまった少年、罗兰の愛と葛藤、そして冒険の日々を描いた物語である。

DATA ●放映年：99年4月～00年3月 ●キー局：フジテレビ ●話数：全49話

AMX-109 カブル

ロストマウンテンから発掘されたミリスのMS。主なパイロットはソシエ・ハイム、コレン・ナングーなど。コレン専用機は赤く塗装され、最終回では角飾りが付いた（右写真）。



▲中央がコレン・ナングー専用機



「G」、「W」に続くガンダムで、やはり宇宙世紀ではない。本作を含めて「平成ガンダム三部作」と呼ばれることもある。「ガンダム」と同じく戦争を題材にした物語ではあるが、舞台は戦後の時代に設定されている。A.W.（アフターウォー）、宇宙独立戦争が終結してから15年、戦争の傷跡に苦しむ人々や、たくましく生きる子供たちの姿を描く物語である。

DATA ●放映年 96年4月～96年12月 ●キー局・テレ朝日 ●話数 全39話



DTM-7200
ドーシートⅢ

ドーシートの発展型。胸部ユニットがウォータージェットエンジンに換装され機動性が向上した。反面、陸上での機動力が低下し、実質的には水中専用機。



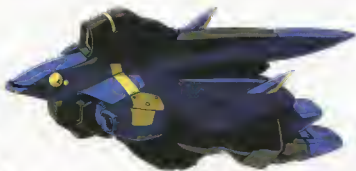
DTM-7000
ドーシート

旧連邦軍が開発した水陸両用モビルスーツ。水中では翼部スクルーにて航行する。戦後はシーバルチャーなどによって運用されることが多かった。



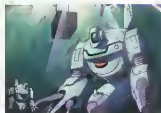
GT-9600+S-1
ガンダムレオバルド
水中オプションS-1

旧連邦軍の重火器装備型ガンダム。水中戦用の武装をほとんど持たないガンダムレオバルドに、小型潜水艇や多連装魚雷ランチャーをオプションとして装備した姿。



ハンドメイドMA
エスペランサ

制式採用された機体ではなくハンドメイドのMA。女MS乗りのエニル・エルが搭乗したが、「X」の敵役、フロスト兄弟との戦闘で撃破された。



DTM-6600
ドーシート水中型

元は旧連邦軍の使用する主力MS、ドーシートの支援を目的とした王ビルボッドで、それを深海作業用へ改修した機体。第16話「私も人間（ひと）だから」に登場。

